



OKAZAKI
RENAISSANCE



郷土食の
八丁味噌
造りにみる
歴史的なる
風情を磨く



岡崎市歴史まちづくり
シンポジウム

記録集

日時 令和元年 11月17日 (日)

場所 岡崎市図書館交流プラザ・りぶらホール

主催 岡崎市(都市整備部まちづくりデザイン課)

目 次

開催趣旨	3
プログラム	4
講師・演題	5
開幕 市長挨拶	6
第1部 基調講演1 須田 寛氏	7～19
第2部 基調講演2 吉田 修氏	20～30
第3部 パネルディスカッション	31～42
アンケート集計	43～45
配布物一覧	46～47

開 催 趣 旨

八丁味噌は、旧東海道を挟んで立地する2つの老舗が、300年以上続く伝統製法を守り継ぎ、天然醸造の長期熟成により製造している豆味噌で、岡崎人にとって日々の生活に浸透している、かけがえのない味。

この郷土食の八丁味噌造りが醸し出す歴史的な風情や情緒、たたずまいが、現代の人々の暮らしやコミュニティの形成、愛情と誇りの醸成にどのようにつながっているのか、そして、これらの歴史文化資産をどうやって持続的に継承し、地域活性化や観光振興につなげていけるよう、「岡崎市歴史的風致維持向上計画」における歴史的風致である「郷土食の八丁味噌造りにみる歴史的風致」の維持向上を目的としてシンポジウムを開催しました。

プログラム

開幕 13:30 内田市長あいさつ

第1部 13:35 基調講演①
「産業観光の未来」
講師：須田 寛

第2部 14:20 基調講演②
「食文化を活かした公民連携による
地域活性化」
講師：吉田 修

休憩 15:05 (10分間)

第3部 15:15 パネルディスカッション
「郷土食の八丁味噌造りの
歴史文化資産を活かした
まちづくりの新たな展開」
コーディネーター：瀬口 哲夫
パネリスト：須田 寛・吉田 修
早川久右衛門
(合資会社八丁味噌代表社員)
浅井信太郎
(株式会社まるや八丁味噌代表取締役)

閉幕 16:15

講師紹介

須田 寛 すだ ひろし

全国産業観光推進協議会会長
東海旅客鉄道株式会社相談役
日本商工会議所観光専門委員会学識委員



【略歴】

1931年京都府生まれ。1954年、京都大学法学部卒業後日本国有鉄道（国鉄）に入社。1987年、JR東海の初代代表取締役社長就任。1995年、JR東海代表取締役社長を退任し、同社代表取締役会長に就任。2004年、JR東海代表取締役会長を退任し、同社相談役に就任。

吉田 修 よしだ おさむ

愛知産業大学経営学部教授
教養教育センター長



【略歴】

岐阜県関市出身。平成元年から愛知県岡崎市に在住。京都大学文学部卒業、京都大学大学院博士課程哲学専攻単位取得満期退学、修士（文学）。愛知産業大学短期大学助教授を経て、愛知産業大学教授。愛知産業大学では通信教育部長、地域共同教育研究センター長、学長室長を経て、現在教養教育センター長。

瀬口 哲夫 せぐち てつお

岡崎市歴史まちづくり協議会会長
岡崎城跡整備委員会委員長
岡崎市景観審議会会長
名古屋市立大学名誉教授



岡崎市歴史まちづくり協議会会長の瀬口哲夫氏が体調不良のため、岡崎市歴史ま

ちづくり協議会副会長の加藤安信氏にコーディネーターをお願いし実施しました。

出演者 講師 演題

第1部 基調講演

「産業観光の未来」

講師 須田 寛

第2部 基調講演

「食文化を活かした公民連携による地域活性化」

講師 吉田 修

第3部 パネルディスカッション

「郷土食の八丁味噌造りの歴史文化資産を活かした

まちづくりの新たな展開」

コーディネーター 加藤 安信

パネラー 須田 寛

吉田 修

早川 久右衛門（合資会社八丁味噌代表社員）

浅井 信太郎（株式会社まるや八丁味噌代表取締役）

開 幕 内田市長挨拶

岡崎市長の内田康宏であります。本日は歴史まちづくりシンポジウムを開催いたしましたところ、多くの皆さまがたにご来場いただきまして厚く御礼を申し上げます。

本市は平成 28 年度に国から歴史まちづくりの認定を受けましてから、今年で 4 年目となります。多様な歴史文化資産を生かしたまちづくりを通じて、この町に生まれ育った子どもたちが自らのふるさに対して、これまで以上に大きな愛情と誇りの持てる、「夢ある新しい岡崎」を目指し、着実に取り組んでいるところであります。今回のシンポジウムのテーマであります、本市特産の八丁味噌は岡崎城から八丁、約 870 メートルの距離にあります旧東海道を挟んで立地するカクキュー、まるやの二つの老舗が、大豆と、塩と、水だけで熟成させる伝統手法によるみそ造りを江戸時代から代々続けておみえになります。まさにお城、大樹寺と並ぶ、岡崎の観光産業の、三種の神器の一つといえるものであります。

また、みそ煮込みうどんやみそかつ、みそ田楽などとともに、岡崎まぜめんなどの新しい八丁味噌グルメが市内各地の飲食店で提供されております。本市といたしましても、こうした取り組みをさらに広く皆さまに知っていただけますよう積極的に PR を行い、観光振興や地域の活性化につなげてまいりたいと考えております。

さて、本市の玄関口として 50 年に 1 度の大改修を行っております、東岡崎駅周辺地区におきましては、駅北口の家康公ひろばの上に高さ 9.5 メートルという、日本一の高さで偉容を誇る、若き日の徳川家康公の騎馬像が完成いたしましたところであります。何よりもうれしいのは、1 億円を超える製作費のほとんどが、多くの企業や個人の方からの寄付により賄えたことであります。まさに岡崎市民のまごころの象徴であるといえます。これは、本市が徳川家康公の生誕の地であることを誇りに思う、市民の方々の強い愛郷心があればこそと、ご協力をいただきました皆さまにあらためて感謝をするとともに、立場を離れて一市民としても大変うれしく思っているところであります。この像は駅のホームや電車の窓からも見えまして、間違いなく今後、本市の新しいシンボルになると確信いたしております。そして、この像は単なる観光のスポットとして造ったわけではありまして、子どもたちが入学試験やスポーツの大会に臨むときに祈りをささげる場、あるいはかつて桶狭間の戦いで敗れた松平元康が再起の心を持って徳川家康に改名し、新しい歩みを始めた故事にならい、人生の壁に当たったときに再出発への思いを奮い立たせる場ともなればと考えております。

最後になりますが、本日のシンポジウムを契機といたしまして本市の歴史まちづくりへの関心や機運が一層高まり、地域の活性化や観光振興につながりますことを期待申し上げまして、開催のあいさつとさせていただきます。本日は最後までどうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

第1部 基調講演

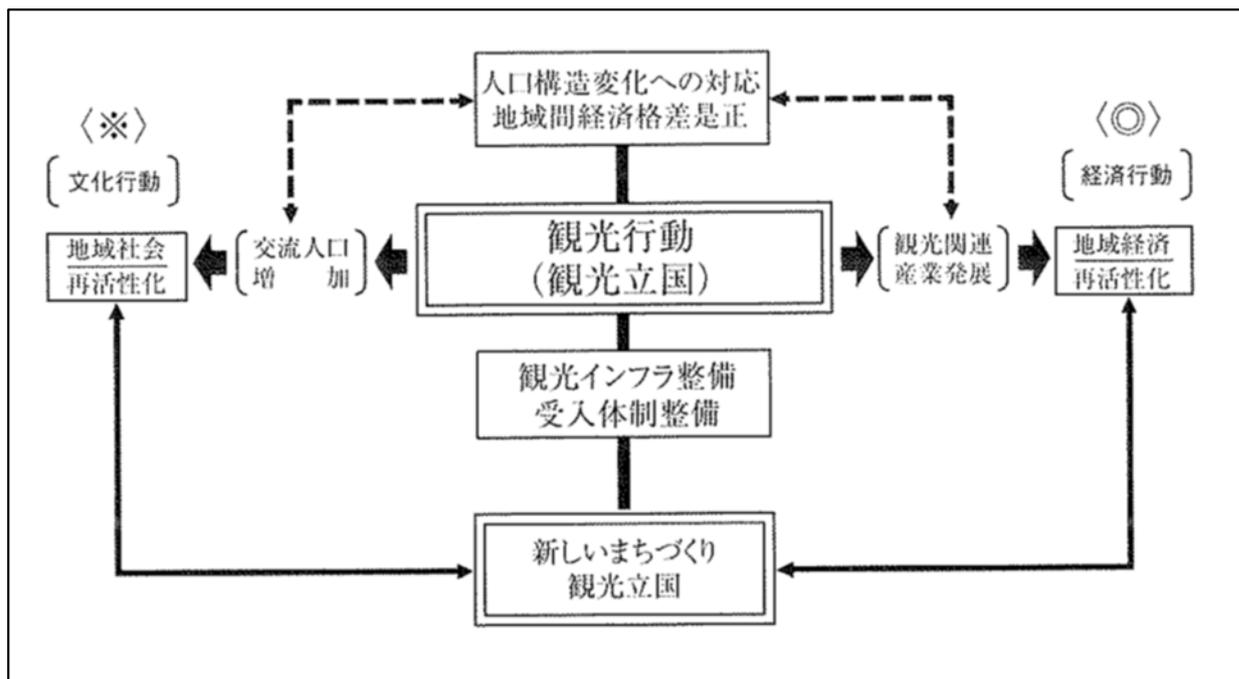
「産業観光の未来」 講師 須田 寛



JR 東海の須田でございます。お手元に『産業観光の今とこれから』というレジュメをお配りしてございます。私は、ちょっと早口でございますから、これをご覧いただきながらお聴き取りいただければ幸いです。

何をお話するかと申しますと、愛知万博のときから始めたわけでございます。私どもが産業観光ということを提唱いたしております。ものづくりの観光でございます。それにつきまして、ちょうど今日のテーマでございますように、この地域の、八丁味噌が食文化として非常に大きく発展をいたしております。大勢の方が、味わい、あるいは工場の見学のために全国からおいでになるわけでございます。これこそまさに産業観光でございます。ものづくりを観光資源としてご覧になる。そしてまた、そこでいろんな体験なり、味わいもなされる。これが本当の産業観光でございます。八丁味噌の岡崎の産業観光は、みその醸造所の2カ所を中心としたものに数十万の方がおいでになるわけです。大変な観光資源だと存じます。そんなことを今日はお話をしてみたいと思っております。従いまして産業観光という言葉はそのような意味でございます。ものづくりについての観光と、こういうことでございます。今日はそのことについて岡崎の、三河地区のこれからの産業観光も念頭に置きながら、皆さんとご一緒に考えてみたいと思っております。

お手元にちょっと紙がございますけれども、1ページには何が書いてあるかと申しますと、観光というのはい体、どういうものなのかと。



釈迦に説法かと存じますけれども、もう一遍、これの確認を申し上げときたい。これは正直いって、誤解をしている方が中にはいらっしゃいます。それから、産業観光はその中でどういう位置を占めて、また、どういう役割を持っているのかということについて次にお話をしたいと思っております。上に観光の意味と役割の図式が書いてございますが、これを最初にご覧をいただければと思います。

真ん中に観光と書いてございますけれども、観光には二つの側面があると思います。まず、その前に観光という言葉、一体、どこからきた言葉なのか。これは昔、中国に『易経』という書物がございました。今から2000年前とありますけれども、その中にある言葉でございまして、観国之光、観光の観と国の光と書くわけでありあります。これを略して観光といているわけでございます。これは中国の『易経』の儒教の古典でございます。その中にある言葉でございます。意識をいたしますと、国の光を、心を込めて見ることが、あるいは心を込めて見せることが人的交流を促進して地域の発展につながるから、首長、つまり王と書いてありますけれども、首長たるものはそれを心してやれと、こういう教えなのです。その頭の観国之光というところだけを取る。厳密にいいますと、国の光を観るは、もって王の賓たるに用いるによろしという漢文の頭の所だけを取って観光とっております。

この意味でございましてけれども、観というのは見るという言葉でございましてけれども、これは解釈として心を込めて見る、あるいは心を込めて学ぶという意味がある。心を込めてというものが観の中に入っている。見ものの見とはちょっと字が違うのはそれだそうであります。同時にこれは示すとも読むわけです。心を込めて示す、見せる。あるいは誇りを持って見せるという意味だそうでございます。いずれも心が入っている。見せたり、見たりするわけでありましてけれども、そういうふうな意味合いだということでありまして、国と申しますのは、2000年前当時の中国ですから、群雄割拠の時代でございますので、今の中国とかではなくて、日本でいえば地方の首長さん、都道府県市町村単位、その程度の大きさのものだというふうに考えればよいと思います。だから、群雄割拠の時代に多くの国がたくさんあったらしいのであります。お互いに交流をして優れたも

のを見たり、見せたり、心を込めてやることによって平和的にやろうじゃありませんか。人的交流を図って文化を高めましょうよ。そういうふうなことを教えているのが『易経』の言葉であります。

問題はこの面に書いてございますように、観光には、二つの行動の面から見る側面がある。観光という行動を見ますと、左のほうに交流人口の増加と書いてございます。これはお分かりのように、観光によって人が観光地にまいりますから、そこに当然、交流が起こります。そこには定住人口がいるわけですから、住んでいる方の所に交流が加わるわけですから、交流人口がプラスになります。例えばある観光地に100人の人が来れば、定住人口プラス100人の交流のチャンスが生まれるわけです。それが地域の社会を活性化させるわけであり、従って、人口はこれからどんどん減るかと思えますけれども、交流人口を増やせば、それはカバーできる。国交省の試算によりますと、定住人口が1人減った場合に外国人観光客を8人呼べば、同じ経済効果、社会効果があるそうであり、従って交流が盛んになるわけですね。人的な交流が盛んになるということは、ささやかだけれどもそこに文化が創生、発展することを意味するわけであり、文化の発展というのは、人的な交流から生まれていることは、日本の奈良時代をご覧になれば分かるわけであり、私が観光地に行くとそこに文化が生まれる、大勢の人が、地域の人が交流しておりますと、そこに文化が自然に発生していく。これは間違いない。観光はその意味では文化行動という側面を持っております。

今度は右のほうの図を見ていただきますと、観光産業の発展と書いてあります。これは観光によってお金が動くわけです。言葉は悪いですけどもお金が落ちるわけです。資金の循環がそこに起こります。地域の経済が活性化されるわけであり、はっきりいえば、儲かるわけです。これが観光の一つの経済効果だと思えます。観光はそういう効果をもたらすことは、皆さんのお解りのとおりだと思えます。観光は経済行動です。年間26兆、間接税も入れたら50兆という計算さでございますから、自動車とあまり変わらないぐらいの経済効果を持っている。そうすると、左のほうでは観光は文化行動であり、右のほうでは経済行動なのです。経済行動であれ、文化行動であれ、観光が進んでまいりますと、下に書いてあるようにまちづくりが当然そこで進むわけであり、まちづくりが今度は観光の増進に影響していく、相互効果があって双方矢印が書いてあるのはそういうことでございます。大きな循環が始まるわけです。そうすると観光客もどんどん増える。まちづくりが盛んになる、また、増える。そこまで持っていければ、観光というものは一つの目的が達成されたことになり、交流によって文化が高まるということであり、それだけを皆さんとともに確認をしたいというのは、なぜかと申しますと、観光はただの遊びではなくて、文化的行動であり、経済行動である。まちづくりにつながる文化行動で経済行動だということであり、

例えば、今の八丁味噌でも、産業としてまちにももちろん貢献されるわけであり、大勢の観光客がまいります。いろいろ消費をなさいます。あの付近には駐車場もござい、食堂もござい、いろいろなものがあるわけであり、先ほども市長さんがおっしゃいましたように、お城もあるわけです。そういうものの観光客が来ると、あの付近一帯が華やいでくる。活気がござい、あの工場の付近には、まちづくりが明らかにできているわけです。それが大きくなると、岡崎という大きなまちが観光によって、まちづくりが進んでくることが十分に考えられる。そういうことがこの中から出てくると思えます。従って、観光は文化行動であり、経済行動であって、ただの遊びではないということだけは、釈迦に説法でございますけど確認をしました。

遊びの要素がないのか。あるわけであり、なぜか。観光地は、人に観光地に行ってもらわなければ観光にならないわけですね。そういたしますと、当然そこに楽しいものがなければいけない、面白いものがなければいけない。人を呼ぶためには遊びの要素も要りますし、楽しいことでも必要なのです。観光に人に行ってもらうためには、遊びの側面は必ず観光にあつていいと思えます。それは目的ではない。よく私どもが、観光のためにいろいろご努力をしていただきたいという場合には、少しご寄付をいただきたいと思います、遊びに

出す金はないと言って門前払いを食ったことがあるのです。これは数年前です。かなりの有力な財界の方がそう言っています。困るわけでございます。だから、そういう発想では困るわけで、この辺だけは皆さんとともに経済行動であり、文化行動であり、まちづくりにつながる行動だということの確認をさせていただきたい。

その次に産業観光でございますけれども、新しい一つの分野が私は産業観光じゃないかと思えます。という意味は1枚目の下に枠に囲んで書いてあります。

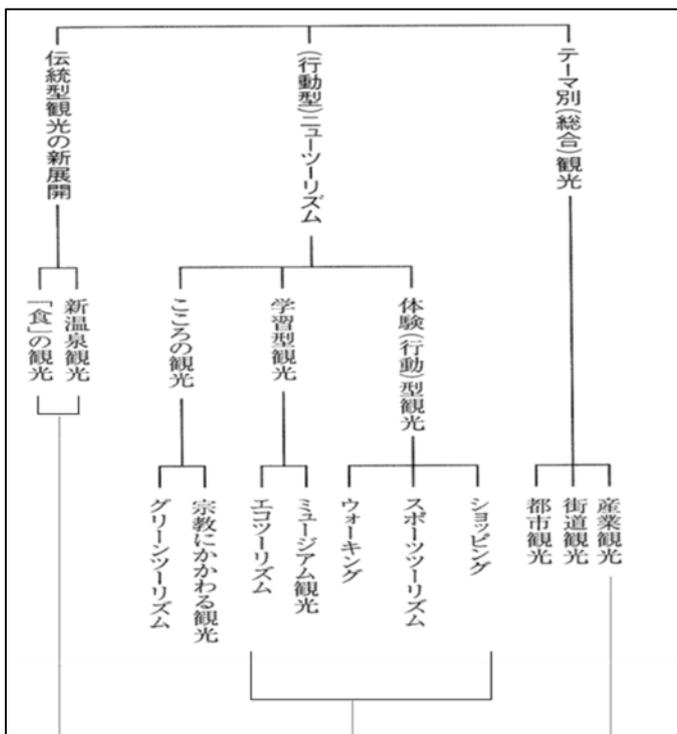
「産業観光」とは歴史的・文化的価値のある産業文化財（遺産）、生産現場（工場、工房）、産業製品等に触れ、ものづくりのころを探ると共に、人的交流を図る観光をいう。

歴史的文化的活用の産業文化材。つまり、産業遺産ですね。昔の工場とか、昔の機械とか、そういうようなものは今、立派な観光資源になっております。「八丁味噌の郷」においても昔の道具やなんかが観光資源になっているわけで、あれは昔の産業遺産でございます。それから、ものをつくっている生産の現場。例えば工場見学。この辺でもいろんな自動車の工場見学ございましょうし、いろんなものがあるわけでございますが、例えば焼き物工場とか、工房の生産現場、ものをつくっている場所を見ること。それが観光資源の一つ。それから、そこでできる製品、例えば焼き物です。そういったものは見ること自体が観光資源になるわけでありませう。そういったものと、産業遺産と、過去のもの、現在ものをつくっている工場などの場所と、出来上がったものと、過去・現在まで見て、場合によれば、宇宙センターなんて大観光資源になっておりますし、山梨のリニアの実験線も観光資源になっておりますから、これは未来であります。未来も含めたものを見る。それを、心を込めて学ぶ。それが、私の産業観光の定義でございます。ここに書いてあるとおりでございますし、そして、ものづくりの心に触れて、人的交流を図る。これも心に触れてってことを言っているのは、観光だからでございます。そんなことが観光資源です。

2ページにまいりますと、それでは観光というのはどんな種類があるのか。はっきり申し上げて、従来型の観光というのが他にあるのです。従来の観光は何かというと、自然景観観光ですね。自然景観とは景色を見る観光。それから、歴史文化観光。お城とか、あるいはお寺とか、神社とか、昔のものをいろいろ見る。そういう

歴史的な観光、人のつくったものを見る観光ですね。そういう二つの、自然の景観を見る観光と、人のつくった歴史文化観光が昔の観光の主流で、それに温泉がくっついていたので。その観光の他に、最近、観光客が増えてきますと、従来型の観光だけではマンネリになって観光客が増えていきませんので、いろんな新しい観光しようという提案をするわけでありませう。それをやりましたものがここに書いてある三つのグループです。

一つはテーマ別です。ものを見るときに、例えばものづくりという観点からいろんなものを見ると、ものが違った角度から見えてくる。そこに違った魅力がつけられるということで、ものづくりから見ようというのは産業観光。ものづくりと



いうものをテーマにしてもう一遍、見つめ直そうということです。

それから、道の観光というのは街道観光。道から見ると景色が違って見えてまいります。街並み、例えば有松のような所は街道観光。道を歩いて初めて有松の良さ分かるわけでありまして、正面玄関から家を見ただけでは分からないものがそこにある。あれを街道観光と申します。特に今、東海道とか中山道の宿場をウォーキングするのがはやっております。これが街道観光、道という角度からものを見る。都市は、都市全体としてある一つの雰囲気といいますか、そういうものを見るってことでありまして、岡崎の何々というよりも岡崎市というものを見て、そこをそぞろ歩きしながら自分でその中から好きな観光シーンを選び出していくと、こういう都市観光がございます。これがテーマ別に通ずる。

あとは行動型ニューツーリズムをここに書いてございますが、最近はいろいろはやっておりますけど、ウォーキングだとか、ショッピングだとか、スポーツだとかいろいろございます。

それから、従来型の観光についても、温泉について新しい考え方があって、単に温泉に入って宴会をするだけではなしに、温泉は一体どうやってできたのかと。温泉の泉源ごとに温泉を学ぶような、そういうシステムをつくっている所が別府温泉にあります。学習的要素が温泉観光に入ってきたということで、一つの新しい温泉観光なのです。

もう一つ食の観光は、食べ物。これはここに書いてありますように、この地域の大きな一つの観光資源であるわけがございます。昔は観光に付帯をしていたわけです。観光地に行って、うまいものを食べる。あるいはお菓子を買って帰る。ところが最近、資源が独立して食の観光という独立した分野になってきたわけがあります。それはグルメコンクールとかグルメって言葉がはやりだしました。先般、豊川で確かグルメコンクールがあったと思いますけれども、第1位が宇都宮のギョーザで、第3位ぐらいに豊川のいなりずしが入ったのです。そういう一般的な、比較的庶民的な食べ物をもう一遍、見つめ直そうということです。グルメでトップクラスを取った所に観光客が来るようになりました。例えば宇都宮には、大量にギョーザを食べたり、買ったりする人が来たわけがあります。豊川稲荷には、いなりずしを買い求め大勢の人が来たことがあります。まだ今も多分、続いていると思います。また、新しく食の観光に立候補するところがあって、八丁味噌もあれを食べるために、独特の味わいをするために大勢の方が来るわけがあります。

これを国が最近、補助金の対象に盛んにするようにいたしました。食の観光を、昔からの観光と思われるといけないから、新しい食の観光というために国土交通省がガストロノミーツーリズムとிட்டのです。皆さん、ガストロノミーという単語をご存じですか。私、英語の成績が悪かったからでございましょうけど、知りませんでした。辞書を引きました。美食と書いてある。美しい食と書いてあるのです。ちょっと違います。食の観光って、郷土食のような素朴な食べ物とかで、美食ではない。美食ってフルコースを連想しますがそうじゃない。そこら辺にあるおそばを食べるのも、信州そばのような所については一つの大きなブランドの観光ですね。食の観光です。だから、美食だけではないのでちょっと誤解を招くのですが、国土交通省が新しい観光に補助金を出すというと、英語にして違うイメージを出さなきゃいけないのでしょう。産業観光でも補助金を出すときは、インダストリアルツーリズムということで補助金を出てきたりしますから、英語を使うと新しいものをつくったような気がするのです。食の観光というのは今、ガストロノミーツーリズムというので驚きました。私はこういうものはあんまり好きではありません。だから、新しい食の観光と申し上げておきます。

八丁味噌についても新しい食の観光として今、クローズアップされております。昔は単に味噌の倉庫を見るぐらいだった。今は造るのを体験させる所も場所によってはあるそうです。八丁味噌についてもあそこに資料館があって、いろんなものを並べておられて、単なるいわゆる見物ではなしに学習観光的要素が非常に強いです。ガイドツアーもやっておられます。だから、新しい食の観光になってきて、八丁味噌だけ見に岡崎に来る

人がいるはずでございます。もう独立した観光です。豊川稲荷さんが、嘆いておりましたね。当然、豊川には来るようになったと。豊川稲荷には、全然来てくれないって言うのですね。豊川稲荷は、多分いなりずしを社の中では置かないのでしょうね。だから来ない。宇都宮の人に聞いたら、宇都宮に大勢来るようになった。みんなギョーザだけ買って帰ってしまうと。まちを回ってくれないと言うのです。そういう嘆きは確かにございます。岡崎は城下町ですから、お味噌だけ見て帰ることは多分、ないと思いますけども、八丁味噌が有名になってきた場合には、そういうことがあり得るかもしれません。そうならないようにしていただきたい。食の観光はそういう異様な魅力を持っている、新しい観光の一つのジャンルであります。

いろいろな工夫をして、これだけで新しい観光地になった所がございます。例えば富士宮ってまちがありますが、あれは富士山のふもとのもちで一種の門前町みたいなものです。あそこは焼きそばで有名になりました。なぜ、あそこが焼きそばで有名になるか分かりませんよね。喜多方という福島県に城下町があります。城下町として立派なもので、それだけで観光価値があるのですけれども、あそこはラーメンなのですね。喜多方ラーメンなのです。ラーメンは、日本でできたものではありません。あそこの夜泣きそば屋がいて、ラーメンがうまかったというので、それが週刊誌に掲載されたのです。そしたら、東京などからたくさんそばを食べに来た。だから、いつの間か、城下町がラーメンのまちになりました。城下町なんか回らない。みんなラーメンの箱買って帰ると言うのです。駅やいたるところは、ラーメンだらけです。みんなあそこで始まったものじゃないのですね。あそこの人々がそれを取り上げて観光資源にただけです。観光というものは、そんなものなのです。資源はストーリーの作り方と、情報の出し方でどこでもできるのです。例えば岡崎がラーメンのまちになろうとしたら、不可能じゃないと思います。みそと一緒にあったそばでもお作りになり、グルメコンクールで入賞すれば、多くの方々が来ると思いますよ。

そんなこともあるということでございまして、いろんな観光が、新しいものがどんどん出てくる。このようなことがあって、産業観光は一つのテーマ別の観光という地位を持っているものだということをご承知いただきたいです。例えば海です。海というのは見るときれいな景観観光、海の景色、外景を見るというのが海の観光の、普通の観光の仕方です。ところがあれを産業観光から見たらどうなるのでありましょか。あそこは漁場です。魚を捕る場所ですね。第1次産業の場所です。そうすると例えば、どうやって魚を捕るのか。地引き網で捕るのか、大謀網で捕るのか、あるいは一本釣りするのかとかございます。地引き網になりますと立派な観光資源になるのです。地引き網の体験は、今の都会の人にとっては、大変な魅力のある観光資源です。あるいは潮干狩りができるかどうか。あれも観光資源です。そうなりますと、漁業観光の場に海はなるわけです。全く海の魅力は違った角度が出てくるわけでありまして、景色だけじゃないです。

次に海は第3次産業の場なのです。交通運輸の第3次産業です。あそこは、船が走ります。海に遊覧船がある。今度は、海の上を走ることが観光資源になる。海の角度が、また違った角度から海の魅力が出てくる。観光資源の走らないような荒海ではそんなふうにならない。静かな海だとそれもできる。いろんなことができるわけでありまして。例えばいかだの養殖。真珠のいかだがございます。最近、いかだから酒瓶をつるして、酒の熟成を海につるしてやるのを観光資源にしている所が岩手県に出てまいりました。今度の観光コンクールで第1位になりました。海の観光は、そこまで出てきているのですね。これは一種の漁業養殖観光です。カキのいかだがございますね。あれの中にカキの殻をつるしてカキの養殖するのですが、カキの代わりにあのいかだをそのまま使って、酒の瓶を密封して海の中へ沈めるそうです。一定の期間おきましてそれを上げるとうまいそうです。沈没船の中でウイスキーが熟成されているのを発見して、ヨーロッパの人が酒を海の中で熟成すると違う味になるってこと発見したのです。それをやりまして、酒瓶を海の中へつるす。その作業を観光客にやってもらう。次に引き上げる。それを船の上で飲む。そういうのが最近、岩手県の広田湾で始まっております。

そうなるもまた、海は全然、違った魅力がそこから出てくるわけですね。海は、3面でも4面でも出てくる。違った観光をすることによって違った魅力が出てくるわけです。そうしないと観光客が同じ所に何遍も来て飽きてしまいますから、マンネリになると来なくなります。そういうことが最近、出てきているということをご承知おきいただきたい。産業観光は、そういうふうな今までの観光資源の見方を、ものづくりというところに視点を置いて見ることによって、今まで発見されなかった新しい魅力を発見しようという、テーマ別観光の代表の例だということをお考えいただきたい。そういう位置付けになっているということですね。それが産業観光の位置でございます。

いつから始めたか。これは実は愛知万博なのです。愛知万博が2005年ですが、開かれました。平成17年だったと思います。あれが開かれるときに、投票があったわけでございます。BIE、国際万国博覧会協会が投票があって、立候補しているまちから選ぶわけでありまして。あのときは、カナダのカルガリーと愛知県だったです。そこで票を持っている国に、票を入れてもらわなきゃいけません。根回しに行くわけでございますね。ところが面白いことございまして、国単位になっているのです。アフリカに行きますと、あそこは50いくつか独立国があるのだそうです。昔のフランスやイギリスの植民地が全部、独立していますから、ものすごい票を持っているのです。人口20万、このまちの半分ぐらいの人口を持っている所にちゃんと国があって、王様が大統領がいるわけでございます。ここの市長さんは、あれから見れば大統領でございます。そういう国がある。みんな1票持っているのです。不平等だと思いますね。フランスも1票で、アフリカの何とかという20万ぐらいの国も1票。しかし、それは票持っていますから、みんな根回しをします。

行って驚いたのは、愛知県と言って誰も知らなかったそうです。ほとんど知らなかったそうです。フランスに行っても知らない。外国の地図は、県名が書いてないのです。愛知のように、県庁所在地名と県名の違う所は地図に出てこないそうです。愛知は、どこですかと。カリブ海に何とかみたいな所ありますよね、あんたカリブ海ですか？とこう聞かれたという。あそこにハイチって国がある。HAITIと書きます。オランダ領から独立した国。HAITIの発音のHはサイレントですから、アイチと発音するのだそうです。「カリブ海から日本人がなぜ来るのですか？」と言われてたというのです。それぐらい知られてないそうです。名古屋と言っても誰も知らない。ようやくトヨタ自動車の話をしたら分かったという。その車を作っている隣のまちだ。そんなものだそうですよ。これでは投票してくれませんよと。えらいことですよということになったわけでありまして。ところが、カルガリーは前にオリンピックやっていた。オリンピックをやっている所がもう一遍、万博を何もやる必要はないだろうと。それなら初めての所にやらせてやろうというので通ったのでありまして、知名度が高いから通ったのではないそうです。それを根回しに行った人は痛感をしたそうでございます。

ところが決まりました。決まってから開催まで6年あったのです。6年間に愛知、名古屋の知名度を高めなければ、誰も来ないということになったのです。何とかしなきゃいけない。何しましょうか。外国の人にも日本人にも知名度を高めるなら観光しかないだろうなというのです。愛知には、観光資源が何もありませんよと言うから、そんなことはありませんと。ものづくりがあるではありませんか。これをそのまま見せればいいじゃありませんか。ということから始まったのが、産業観光なのです。私があるときに商工会議所の連中に、文化委員会の担当を命じられたのです。私は、一生懸命やりました。しかし、大部分の人が産業観光というのが、ぴんとこないものですから、これを知っていただくのに大変な時間がかかりました。ありがたいことに小泉内閣が、ちょうどその頃、観光立国と言いだしたわけです。国が観光を取り上げだしたのです。観光に対する認識が、ただの遊びから少し変わってきたわけです。そのときにこちらからも若干説明をしたからかもしれませんけど、産業観光を国の観光基本計画の柱の一つにしてくれたのです。産業観光の促進を入れて、産業施設の見学等の新しい観光の推進と書いてある。それが国の方針の中に柱で入った。特に愛知県の万博のときに各県、観光ビジョンをつくりました。国の方針の柱に入りますと、地方の観光ビジョンなんかをつくる時には、

一斉にその中に国の方針と一緒に入り込みました。言葉も分からないのにビジョンにした所も実はあります。ですから、何ですかと聞いてきた所もあります。かなりの所がそれで言葉としては入れてくれました。これが割合、急速に私は産業観光が普及した理由だと思えます。愛知県も名古屋市も 2005 年にビジョンをおつくりになりました。私どもが委員で入っていたからですけど、その中にも産業観光というのは対処してあります。その後ずっと愛知県は武将観光、侍の観光と産業観光を柱に今も柱にいただいていると思えます。

そういう経緯があって、幸運に恵まれたために割合、言葉は普及をいたしました。しかし、なかなか中身はそろわない。愛知県も八丁味噌にもおいでいただきましたけれども、商工会議所が中心になりまして、そういう産地のかたがたにも集まっていたいで、産業観光推進協議会をつくって、いろいろネットワークをつくるために努力をいたしました。おかげで、幾つかの拠点の施設は大勢の人が入るようになりました。代表例が八丁味噌の郷であり、同時に名古屋の産業技術記念館、トヨタの自動車博物館、瀬戸の陶磁資料館、今は、陶磁美術館と申しますけれども、こういう拠点施設には数十万の人が入るようになりました。今まではほんの数千人か 1 万人くらいだったのですが、今は産業技術記念館が、確か 50 万人くらいになっているはずですよ。そのうち数万人は外国人だそうです。トヨタの自動車博物館も 30 万人くらい。他も 2~30 万人の方が来ているそうですよ。ですから、その意味では良かったと思っています。ただ、まだ拠点施設だけで、そうでない所では、これからという所がございます。そんなようなことがあって、産業観光というのは、愛知が発祥の地だった。平成 13 年に最初の全国産業観光フォーラムをやったときが最初でございまして、それでもかれこれ十数年の歴史がございます。ここが発祥の地であることを皆さんにご理解いただきたいと思います。そんな経緯がございました。

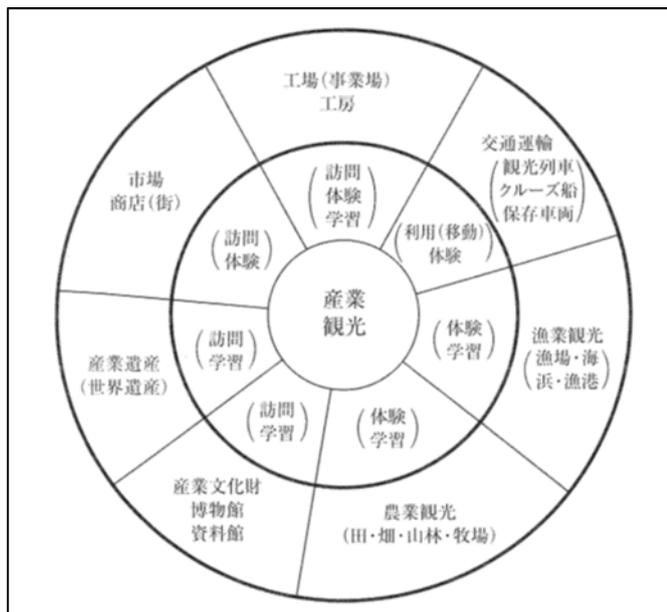
それからこの内容の次の話になるわけですが、3 ページ目の所でございます。

地域密着型（着地型）の観光
「見る」「学ぶ」「体験」する、三位一体の観光
人材育成、まちづくりにつながる観光

産業観光、なぜ私どもがやるかと申しますと、いろんな観光資源としての特色がございます。一つはここにございますように、地域密着型、着地型の観光と書いてございますが、これが非常に大事なのです。日本の観光は、これまでいわゆる発地型の観光なのです。発地型というのは出発地と申します。つまり、観光客が出るまちのことです。東京とか大阪とか、そういう大都市です。その人が観光に行く。どういう情報持っていくか。今は、コンピューターがございまして、当時は大部分の方がガイドブックをお読みになる。あるいは旅行会社の窓口においでになって、話を聞いておいでになるってことが多かったわけですよ。そういたしますと、みんな同じ所行っちゃうわけですよ。京都でも東山か大原三千院にみんなが行く。嵐山に行く。他の所に行かない。そういう偏りが生じます。そういう問題がございます。そういう情報を得てやる。これは発地型の観光と申します。つまり、そういうガイドブックにはもちろん、うそが書いてあるわけではないのでありますけれども、東京や大阪に本社がある出版社の社員が京都に行って、奈良に行って、取材をして書きますから本当のことが書いてあるのですけれども、書いている人は東京の人なのです。東京の人の好きな所を紹介するように、どうしてもなってしまう。これは、発地型ですね。着地型から、受け入れる側から、例えば岡崎なら岡崎、名古屋なら名古屋からどういう観光をしていただきたいかということを出して、こういうものがありますよということを紹介するのが本当の情報なのです。それが従来、なかったわけですよ。

産業観光は工場の見学とか、工房の見学なんてガイドブックには出ませんから、こちらから情報を発信するしかないのです。どうしても着地型の観光になる。その代わり、こういういいものがありますよという情報が発信できる。ただ、大事なものはストーリーです。説明の仕方です。情報の出し方です。その量です。これが大

事なのでありますけれども、要するに観光地側から情報を出すことが、1番その観光地にとってふさわしい観光の仕方がしていただけるので、観光資源としては非常に好ましいやり方なのです。これは産業観光でないといけないことですし、産業観光は、そうでなければ情報が出ていかない。その意味では、非常にいい着地型の観光だったということがいえると思います。



もう一つは見る、学ぶ、体験する、の三位一体と書いてございます。観光というのは見るだけではないのです。だって、見ているだけではどうにもならないのです。それは見ものの見にすぎない、観光の観ではないわけです。心を込めてというのが入りますとそれだけではない。どうしてもそこで体験するという要素と、学ぶという要素が欲しいわけでありまして。やってみなきゃ本当の味は分かりません。それから、学ぶという気持ちがなければいけないのです。または学ばなければいけないのです。他の観光でもできますけれども、この三つが全部、満足できる観光となると産業観光が一番やりやすいと思います。産業観光をやってみますと、ものづくりの過程が全部解りますし、ものづくりの課程が解らなければ面白くありません。

例えば自動車博物館に行きますと、自動車はこうやって作っていることが解ります。素人が見ると、とんでもない作り方しています。それが初めて観光を味わう原因になるわけでありまして。学ぶ観光ですね。それから、体験する。焼き物なんか自分で作ってみなきゃ、あの良さは分かりません。楽しさは分かりません。瀬戸に行きますと、必ず、どこの工房でも、体験ができるようになっています。場所によっては1週間ぐらい滞在して、土をこねてから焼き上がりまで全部を体験するような工程さえあるぐらいであります。お味噌の場合は、みんなにやられたら、衛生上の問題が生じますから無理かと思えますけども、一部の工程だけ取り出して、手作業で豆をつぶすところとか、仕込みするところぐらいを体験させることは、私は、不可能じゃないと思えます。酒の醸造でそういう醸造過程の一部を体験させている所があるそうであります。そうなりますと、一部でも自分でやってみますと、ちょっと違った味わいがそこに出てくるわけですね。非常に意味があると思えます。だから、三位一体の観光が可能なのが産業観光。できるかどうかは別の問題なのですが、他の観光じゃそう簡単にこの三つのことは一緒にできません。

それからもう一つは、これによって人材の育成ができる。名古屋に例があります。栄生に産業技術記念館というトヨタの博物館があります。産業観光の大きな資源になりますけれども、ここは、毎週土曜日になると中学生が来るというのです。機械の前に座ってじっと見ているのだそうです。動物園と一緒にですね。ライオンのおりの前でじっとしている人はいますけど、機械の前でじっとしているのは、僕はあんまり聞いたことない。博物館の人が、「君はここにじっと見ているのは機械が好きかね」と言ったら、「ここにいると心が休まる」と言ったそうです。毎週来る。パスを出した。そうしたら喜んで、今度は日曜日にも来るようになったそうです。その人は、某大メーカーに入って、課長クラスのエンジニアになっているそうです。そういうものなのですね。機械を見ていると人材の育成ができるわけです。機械を見て、学んでいるのでしょうか。勉強しているのでしょうか。自然と知恵になる。そういうことが産業観光にはあります。焼き物でも焼き物の工房を見て、おれは陶工になろうとして一流の陶工になった人がたくさんいるそうです。人材の育成になります。私はなりませんでしたけれども、自動車だって、あれを見たら俺も一つやってやろうとなる人はかなりいると思います。そ

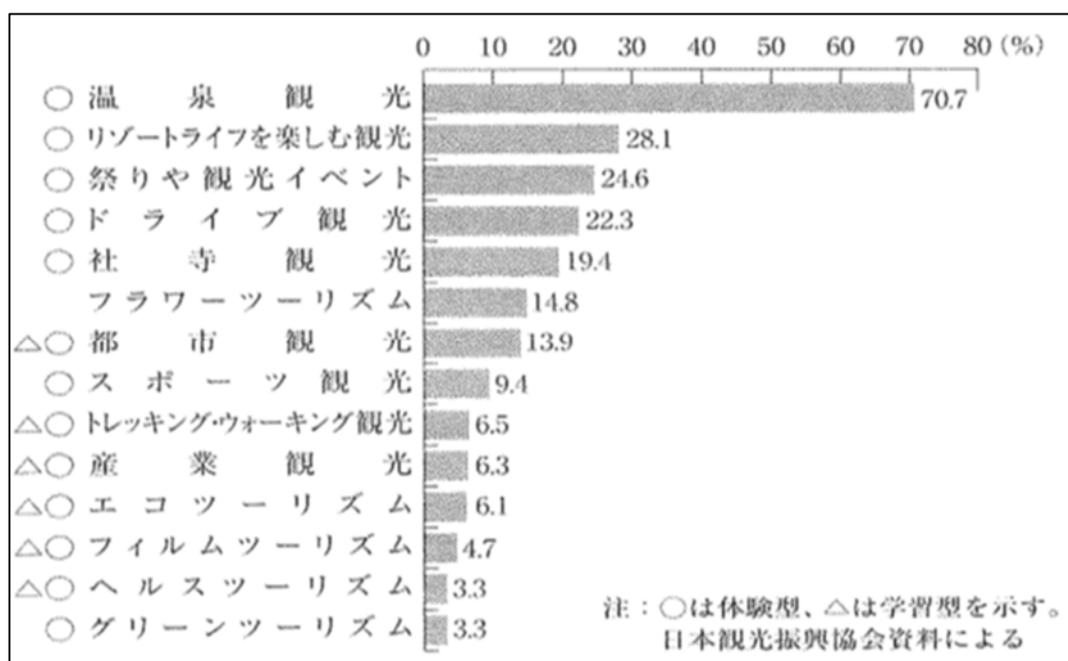
ということが大きくあると思いますね。そんなことが産業観光の場合には、人材育成の効果もあるという。そして、もちろんこれは観光でございますから、八丁味噌でもおやりになっているように、あれが観光資源なった場合には、地域のまちづくりにつながっていくことは皆さんが目の当たりでご覧になっているとおりであります。そんなことであって、まちづくりにつながるということがある。

瀬戸の観光がまちづくりに大きく寄与しております。焼き物がなければ、あそこにあれだけの人は来ません。観光が瀬戸のまちづくりで大きくなって、万博のときに瀬戸の駅前を改造しました。あれは、まさに観光まちづくりですね。瀬戸蔵という大きな観光資料館を真ん中に置きまして、その中に瀬戸の産業の発展に寄与した瀬戸電の本物をどかんと置いてあります。驚くべき博物館です。非常に度肝を抜くようなものがあったものだから有名になりました。あれを中心に瀬戸のまちを万博のときには、道路も再編成されたわけです。だから、観光まちづくりですね。そういう効果があります。また、まちづくりというのは観光客を呼ぶ努力につながるのです。観光客を呼ぼうとすれば、駐車場も作らなければいけませんし、いろんな設備も作らなければいけない。まちの人で、心を合わせる人がいるわけです。その努力イコールまちづくりの努力につながるのです。そういう意味合いが、特に産業観光の場合は強いと思います。

次に産業観光の資源にはどんなものがあるのか、円グラフの一番外縁部に書いてあります。条件がいろいろございますが、体験になるとか、学習になるとかいう効果があって、そういう効果も含めてここに整理してございます。

全国的な観光団体で日本観光協会が、ございます。ここが調査をいたしますと、どういう観光したいかという中で、産業観光をやりたいというのがかなりのウエートを占めているのです。

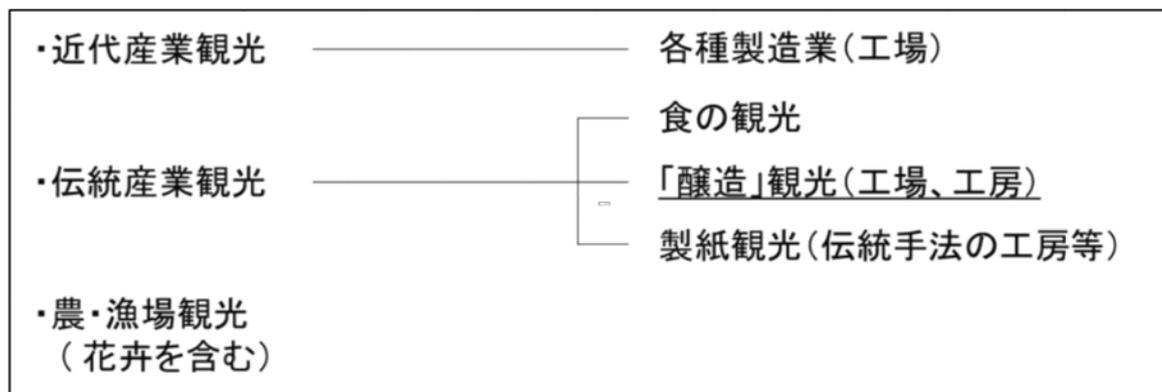
いっぱい項目がある中でこれだけですから、何十項目からのうちの上のほうだけ書いてあるわけですが、この中の上のほうの、例えばリゾートライフを楽しむ観光の中にも産業観光的な要素入っているのです。産業観光という項目を出したらこんな数字になった



ということで、かなりの人が産業観光という言葉に反応しているということです。それがこのデータからお分かりいただけだと思います。調査によっては産業観光が2割ぐらい。産業観光に今、参加している人は年間7000万人いるそうです。これは観光協会の全国的な調査です。ただ、これはいろいろな工場見学をした数の全部の合計ですから、ちょっと数字が曖昧なものもあるかもしれませんが、7000万人の人が何らかの産業観光をしている。そうなりますと、一種の国民観光ですね。日本のような、ものづくりの盛んな所は、結果的にそうなっているということですね。意識してそうなっているわけではない場合があるのです。例えば産業遺産をふらっと人が見ても、観光として意識して見ている場合には、そういうものを受け止めるときの受け止め方が違い

ますから、ただ見るのと、観光としてもものを見るのは見方が違います。観光客とはいえないかも分かりませんが、そんなものが入っている数字ではあると思います。そんなデータもごさいます。

そこで最後になるわけではありますが、三河地方ではどんな観光があるのかというのを、ちょっとここに書いてみました。



皆さまがご存じでしょうから、皆さんの地域が広いと思いますので、その地域をちょっと整理した程度にお考えいただきたいのであります。3種類の観光が全部そろっていると。近代産業観光。ここには大きな大工場がたくさん、近代自動車工場とかたくさんごさいます。例えば三菱自動車なんかは見学を受け付けております、自動車工場です。これもかなりの大勢の見学客が来ています。これはもう、近代産業でございませぬ。それから、その下の伝統産業には、なんととっても食の観光だと思ひます。特に豊川のいなりから始まりまして、いろんなものがごさいます。それからその他に特に最近、食の観光といえば、一つの工業のジャンルとして考えた場合には醸造観光が出てきたわけになります。これは出てきたというより、やっていたいっているのですが、八丁味噌さんも、もちろんそうなのでありますけれども、西三河地区と、知多地区。半田と常滑、それから碧南と西尾、この4市がタツノオトシゴ状に並んでいるのだそうです。竜の子街道観光協議会というものがあるのだそうですよ。その協議会と、それから八丁味噌の社長さまがたにも入っていただいております、発酵文化研究会ができておりまして、これには学者も入っていただいております。発酵というのは一つの化学現象です。醸造のもとになるのは発酵です。学者の先生方が入った委員会で、発酵というものを一つの産業観光の資源にしようじゃないかという動きが出てまいりまして、今のタツノオトシゴとがつながって、4市が今、約30の蔵元を開放して産業観光を始めております。竜の子街道観光協議会をやっているのです。これは、既にやっております。

この間、毎年1回あるのですが、大阪で観光の全国の博覧会見本市のEXPO ジャパンがあつて、数十万人が来る大イベントです。そこに産業観光のブースがあつて、醸造観光のブースをおだしになりました。かなり反響がございました。これが一つの新しい観光として、全国的なものになりそうになってきたわけでありませぬ。西三河の若干範囲を広げて、八丁味噌が既に大きな拠点になっておられますので、醸造観光の一つの拠点として、これをリードしていただき、連携をしていただいで幅の広いこの地域で醸造観光を一つの大きなオリジンといひますか、発祥の地にさせていただければと思ひます。醸造が非常にここは発達しておりますので、工場・工房の見学はいろんな要素がごさいます。これをぜひお願いしたいと、お願いを込めてアンダーラインを

引いてございます。既にやっただいてありますが、紙の観光で案外、有名になってきております小原の和紙のふるさとが、豊田の旧小原村にございます。あそこに和紙、日本紙をすくう体験をさせる所がある。紙の製紙体験をさせる所は全国、そんなにたくさんありません。かなり隠れた観光地になっているのですね。ああいうものもこの三河地区にある。古くから文化がある所はいろんなものがあるわけでありまして。もちろんこれは近代産業が自動車というまでもございせん。

あらゆる産業観光の要素がそろっている。その中から選び出してストーリーをつくって、発信をしていただかないとなかなか全国区の観光にならない。八丁味噌さんは八丁味噌というキャッチフレーズが良かったために、テレビドラマに取り上げられ全国区の観光になりましたけれども、ますますのご発展が期待できるのはそういうふうなことがあるからであります。それから農業場観光、これも産業観光です。それから、花卉(かき)はお花ですね。確か、花卉産業は愛知県が日本一なのです。案外知られてないですけど、渥美半島には菊の温室がございせん。夜はあそこに電灯がついています。花よりも温室を写真に撮るのが観光資源になっている。花より団子でございせん。花を作る温室の灯越しに、ずっと夜電気がついて、あれが素晴らしいというのです。花なんか見ないで温室です。観光というのは、そこまできていっているわけです。いろんなものが観光資源なるということですよ。

(三河地方 今後の課題)

観光資源間の連携によるネットワーク構築

東京、大阪等、大都市圏さらに、主要国への強力な情報発信

－留意点－

リピーター対応を念頭に、演出に工夫を

知多、西三河広域観光圏形成に注力を(醸造観光など、共通点を通じて)

通過地域から拠点地域へ(観光)

今後の課題が一つあるのは、それだけたくさんあるわけでありましてから、三河の観光地でいろんな産業観光地が連携をしていただいて、資源のネットワークを組んでいただきたいわけです。相互に連携をして情報の共有や交換をする。そして発信をする。お客さんを相互に送り合う。ベルト地帯みたいに送り合う。そうなるこの辺に、何日も滞在しても観光できるような、大観光ゾーンに発展することも不可能ではない。もちろん産業観光だけではなく、一般の観光と結び付いてでございますけれども。条件がいいのは東京、大阪の真ん中にあるということでありまして。豊橋にもひかりが2時間に1本止まるようになりました。これも私どものほうでやってみたら、観光客が非常に多ございます。三河地方によく観光客、そして、あの付近の工場に来るから、豊橋に来るとひかりは空っぽになります。だから、ああいうものもお使いいただいて、いろんな意味合いでそういうネットワークを組んで、東京・大阪のお客を呼んでいただく。全国のお客を呼んでいただきたいと思うのであります。

ただ、留意しなければいけないことは、リピーターが増えてくる可能性がございせん。一遍来ると、良かったからまた来る。前に見たからということで2回目は1回目に来たときよりも価値は下がるのです。3遍目に来たらもう、飽きてしまうとなる可能性がございせん。そうならならいようにいろんな演出の工夫をしていただいて、あんなにお金はかけられないでしょうけれども、ディズニーランドはいつ来ても新しいからお客が来るように、時々模様替えをしたりして、違った角度から同じモノづくりを見ていただけるような、例えば見学でも今度は裏から見学をするとか、体験のやり方をいろいろ変えていくとか、そんな工夫をして新しいものを

そこに入れていただければ、リピーターが来てどんどん伸びていくというふうに思っております。それから三河、知多が隣り合わせで同じような醸造観光で共通点もございますので、もっと広域的に広げていただければなど、間に境川があるそうでございますけど、これは昔のことでありまして、今は橋でみんな渡っているわけですから、どんどん交流をしていただいたらどうかと思います。西三河、知多の観光圏をつくっていただいて、そしてそこに地元の名古屋の方はもちろん、東京、大阪、全国の方を呼べるような、価値はあると思います。既に知名度は非常に高いわけですから、そういう観光圏に、醸造観光ってものを一つのきっかけにして、醸造観光とトヨタ自動車だけでも十分人は来ます。市長が来過ぎて困るかも分かりませんが、トヨタ自動車へ来た帰りの人を、醸造観光に回せば、情報の出し方によっては非常にたくさん人が来るのです。ストーリーでつなげばいいのです。あんなもんつながらないじゃないか、つながります。三大話と一緒にです。どんなもんでもつながります。どこかに関係があるのです。だから、そういうふうなことを皆さんで探っていただいて、やっていただければ随分違うと思います。演出の方法、情報の出し方です。

ともすれば愛知県は、観光客の通過地域になりがちなのです。新幹線があるからかも分かりませんが、何としてでも降りていただく。そういうことをさせるためには、この地域の観光というのは非常に大きな要素が占められると思います。私どものほうからぜひ一つお願いをしたい。こんな心境でございます。これからの産業観光は受け入れ体制も考えなければいけません。どんどん工場や工房が見学者を受け入れていただかなければいけません。商工会議所のほうで今、お願いをしてやっていただいております。それから問題は教育の中に観光を入れていくこと。小学校や中学校向けに副読本を作って、あるいは授業をやっていただいて、観光の正しい意味を教えてください。そして、地域の授業の中では、地域のものづくりの話をしていただいたならば、他の地域へ発信をするはずでございます。そういうことを観光と教育の連携によってやっていただく。そして、いうまでもございませんけれども、まちづくりをしていただいて、この地域を観光によるまちづくりというもののモデル地域にもしていただきたい。いろんな希望が三河地域にはございます。そんなことをたくさん申し上げてもと思いますけれども、きょうは皆さんにむしろ、ご説明をするということと同時にお願いに参上した。この三河が全国の観光拠点になっていただきたい。そのためには、八丁味噌を中心とする食の観光というものが、一つの大きな起源になるのではないのだろうか。そんなことを思いながら、今日は参上した次第でございます。どうか一つ、よろしく願いしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

第2部 基調講演

「食文化を活かした公民連携による地域活性化」

講師 吉田 修



愛知産業大学の吉田と申します。本日は基調講演ということで、先ほど須田先生のようにまとまった学術的なことを勉強したわけございませんけれども、私は、岐阜県で生まれて、平成元年から岡崎市に移ってまいりました。ちょうど30年たちました。30年間岡崎でお世話になって、そして岡崎を本当に好きになって、今日、皆さんの顔を拝見すると大体、分かりますけど、この方は、この方はという意味では本当に皆さんと一緒に今まで岡崎を楽しんでまいりました。その中で得たことを体験的なものを含めながら、紹介をさせていただきたいと思います。ただ、今日はぜひ、この講演会で皆さんに私の話というよりも、私が出会った中でこんないい結晶ができたということをお伝えしたいと思います。私はまちづくりデザイン課から講演をと言われたときに嫌だなと思いました。でも、やらなくちゃいけないというのは、今そこに隠れております、味噌六太鼓というものを作り上げた、若い人たちの活動をいろんな場所で紹介しないといけない、それが私の使命だと最近では自覚しております。この前も籠田公園で名古屋のほうから10人ほどみえまして、その人たちの前で若い人と一緒に説明をした覚えがございます。そういう意味では、何かの機会があればと思っていましたら、この機会がございましたので、今日はあそこに控えております味噌六太鼓を中心に、最後は実演をさせていただきます。ぜひ楽しんでいただければと思います。

本当に意識的にやりましたのは15年ぐらいでございますけれども、私の30年間の体験を少し皆さんにご紹介をさせていただければと思います。今回は、私の基調講演のテーマは『食文化を生かした公民連携による地域活性化』、そういうテーマをいただきました。当然、ご存じのように公民連携というのはPFIとかいろんなことで最近、取り上げられています。ただ、岡崎市が一番大きくかじを切りましたのが、私たちの体験では夏祭りでございます。岡崎市が今から8年ぐらい前に、夏祭りが非常に厳しい状況の中で、市民の人たちにやってほしいということで、私もそこから積極的に関わった覚えがございます。それを最後に中心的にご説明申し上げますけど、最初にここに書いてございます、論点とか視点で私のほうにいただきましたのは、地域活性化とか伝統的地場産業、八丁味噌文化、味噌六太鼓。この辺は私が体験してきたことでございます。そしてその次、旧東海道での展開も、藤川宿のむらさき麦まつりというものも一緒に手伝っております。少しご紹介ができると思います。その他、風格のある町並みとか、エリアの価値醸成とか、インバウンド、先ほどの須田先生からもありましたように、この辺は私の直接の領域ではございませんけども、少しご紹介ができればと思っております。

私が、まちづくりデザイン課の方から講演をと言われたのは、この表示を見たからだという。私の履歴書にアイラブ岡崎と書いてあったと。平成23年に岡崎の観光調査をした際に、最後に出したロゴでございます。ですから、今から10年ぐらい前ですね。ちょうどこういうことを考えていました。アイラブ岡崎、もしくはウイラブ岡崎。岡崎ルネッサンス。皆さんご存じかもしれませんけど、岡崎市の職員の名刺の裏側には、いつも岡崎ルネッサンスと書いてございます。そういう意味では私も同じような思いで、岡崎の観光とか、地域の活性化に取り組んでまいりました。ところが、先ほどちょっとご紹介がありましたように、私は、初めて岡崎市の公的な立場で自分の学歴を披歴しますけれども、岡崎市に来る前は、岐阜県関市でございます。岐阜県関市から見ると、愛知県はすごく憧れの地でございます。特に名古屋はどうかと思うと、岡崎市のほうがすごくお城があっていいなという気がいたします。岡崎は私たちにとって手頃な、憧れのまち。また、姉がこちらにて幼児教育でお世話になって、幼稚園の先生になったこともございまして、すごく親しみがございました。大学は京都でございまして、哲学科という非常に変わった学問をしました。先ほど須田先輩と申し上げますけども、須田先生が私より十何年前に、私の先生がちょうど助教授の頃にお世話になられたということをお聞きしました。わたしの専門が哲学でございますので、統計的なものを皆さんにお伝えするということはできませんけれども、逆に今、私たちがここに生きている理由、もしくは志、思い、祭り祭られることの重み、そんなことが少しでもお伝えできればいいかなという気がいたしております。

私が岡崎に来まして取り組んだものは、こんなものがございます。愛知・三河学と地域実習。これは学生を連れてまちの中を歩いたものでございます。それから、岡崎商工会議所慰霊祭でございます。これは、非常にディープな体験をさせていただきました。岡崎は、すごく伝統のあるまちだなということを経験させていただきました。そして、先ほどありました地場産業の深みというのを体験させていただきました。それから、岡崎



城下家康公夏祭り、家康公生誕祭、岡崎泰平の祈り。ちょうど23日にございますけれど、こういうお祭りに関与をさせていただきました。ちょうどこの頃、家康公顕彰400年とか、岡崎市政100周年がございまして、「岡崎の100年企業」をまとめる機会をいただきました。「岡崎の100年企業」の最初に出てまいりますのが、ここに今いらっしゃいます八丁味噌の2社でございます。その縁もありまして、八丁味噌のお二人には、インタビューをさせていただいたりしました。そして去年ですけれども八丁味噌の地理的表示問題が起きました。ところで、この10年ほどのことを私の中でまとめました。いろんな意味で私にとって身近な岡崎がこのように変わって、このような体験をさせていただいたことを少しまとめてご紹介をさせていただきます。

まず、最初に愛知・三河学。これは、本学が持っています通信教育の科目でございます。ご存じかもしれませんが、通信教育はインターネットで授業をとりますと、一度も岡崎の大学なのに来なくて卒業できるのです。そういう意味で、ぜひ1度は自分の母校を訪ねていただきたいということをつくった科目でございます。そこに書いてございますけども、世界がグローバルになってもローカルな意味、地場産業も同じでございますけども、産業資産も同じでございます。造語でグローバルってよくありますけれども、そういうものの大切さを少し知ってほしい。もう一つが、私たちが岡崎を知るといのは、下に書いてございます、NHKの「チョコちゃん」が言っていますけど「ポーっと生きてんじゃねーよ」という話と同じでございます、本当にただ単に知識で本を読んで行くというのは、なかなか自分の中に身に付きません。須田先生も言われたように、体験をする。私はこれを実際に歩いて、岡崎を五感で感ずる。そして、記憶にとどめるというそういう作業を、学生としています。もう十何年続いています。そこから出てきましたのが、こんな形です。

これは観光ガイドのかたがたと一緒に案内をしていただいて、私も案内をする。そして、観光ガイドの方が作っていただいた、大樹寺からのピスタラインを歩くマップもございます。大体、6キロ、八丁味噌が最後でございます。これを6時間ぐらいかけて、康生で食事を自由に取ってくださいって言います。野に放たれた若者が、どこで食べていいか本当に迷います。一生懸命来る前に岡崎の勉強をします。岡崎の観光を勉強してきたのですけれども、放たれるとどこで食べていいのかわからなくなる。けれども、レポートにはこう書いてあります。まちを実際に歩くことによって、想像よりはるかに立派で、歴史や伝統文化を背景にしたまちであることが分かった。本当に口をそろえてみんな言います。本当に素晴らしいまちですね。それは裏を返すと、なんでこんな立派な岡崎市が自分たちの文化を発信しないのかという問いになります。

その下に書いてございます。学生が、「先生、岡崎には観光基本計画がありますよ」と平成18年ぐらいにできたものを教えてくれました。私はそんなものを見ずにずっと授業をやっていました。見たらこんな文章がありました。もしよかったら、ネットに載っていますので全文読んでいただくと結構です。岡崎市観光基本計画作成にあたって、これを書かれたのが丸石醸造の深田正義さんです。この文章を読んだときに、岡崎はどこか違った志のある人がいるのだなと思いました。書き始めがまず違います。『岡崎が、観光に動き始めます』。この前に観光基本計



画策定委員会という検討会がございました。そしてこの基本計画がなったのですけれども、この書き出しだけでも相当違います。そして最後に、「世界の平和を求める道への光になると確信します。岡崎の観光は、日本のため、世界のための大仕事です」、こう書かれると、私はそのときに思いました。こんな大仰な、世界の平和とか、大仕事といわれると、どういうふうに捉えていいかわかりませんでした。でも、こう書かれる人がいるってこと。実はげんき館の隣にある喫茶店のはんなりとか、深田さんのご自宅とか、何回かお訪ねしました。聞いているうちに何となく分かるというものがありました。例えば深田さんは岡崎市民である前に岡崎人であれ。そう言われます。でもそれが、実際に私たちにとってどういうことなのか、これから述べますけれども、非常に深い文章でございました。

次に、学生を連れて今度は観光ではなくて、地域実習として、学生をまちの中に入れました。神明宮大祭と藤川のむらさき麦まつりでございます。当初は、神明宮の大祭は山車を引くだけでした。ところが、引くだけだとお客さんですので、氏子さんとの交わりがないのです。そこで、氏子さんとの交わりを作るために、1週間なり2週間おはやしの練習もさせました。一緒におはやしの練習をして当日に町曳きをさせていただきました。むらさき麦まつりでは、学生が応援キャラクターの武創幻将ムラサキを作りました。武将、やりの幻という名前でございますけれども、応援キャラクターを作って小学生の町ガイドさんと一緒に案内をする。また、経営学部の学生が入場者数の調査をする。むらさき麦まつりの方々との反省会にて調査結果をバックして、一緒に取り組んでまいりました。

そこで学んだことはこれです。1つ目は、新しい祭りでも、伝統的祭りでも、非常に人手不足です。これは明確にいえます。それは多分、祭って何だろうかということになると思います。それから、2番目が大学生でも外部から行った場合、長期の計画が必要だろうという気がします。私も10年ほど学生を入れてよく分かります。最初は少し入る。そして、深く入る。その次が困るのです。授業がもし、閉鎖になったときどうしようかってことがございます。大体、私たちが生きてると、おじいさん、おやじ、私、子ども、孫。大体、自分の人生の視野から見ると、100年ぐらいが大体、見えます。昔、100年なんてものすごく長かったですけれども、今見ると自分のおじいさんは覚えています。それから、お父さんも覚えています。そして、自分、子ども。私は、孫が生まれました。これから何年かすると成長しますけれども、大体100年ぐらいになります。100年の計というのはそれほど長いわけじゃなくて、私たちはそのくらいのことを考えて、これから生きる世界を少し工夫してみる必要があるだろうと思います。祭りには、志のある人がどうしても必要だろうと思います。それ



は、祭りというものの存在理由を常に考える人。これは、非常に難しいことですが、本当にそういう人が必要だと思います。

それから、岡崎商工会議所の物故商工業先覚者・功労者の慰霊祭を、商工会議所がしております。私がこれの名簿を整理することにしました。ところが商工会議所は、終戦直前、戦災を受けまして資料が散逸しました。それから、紙ベースしかデータがなかったものですから、中に入って私でデジタル化をさせていただきました。こういうものをデータ化して、そして最終的にまとめました。ここの3名は、お分かりになる方いらっしゃいますか？一番上のこの方、篠田さんですね。これは官営愛知紡績所です。最初の綿産業を愛知県に根付かせた人です。この人は、杉浦(すぎうら)銀(ぎん)蔵(ぞう)さん。実は、岡崎城の伊賀川沿いに大きな石碑が立っております。志賀重昂氏



の碑文が入って、岡崎電力を最初につくった人です。そしてこの方、臥雲辰致(がうんたっち)といひますね。この方がガラ紡を長野から持ってくる。愛知県は、意外にまれ人がどこかからかやってくる。徳川家も松平みたいな上のほうから上がってくるってことが分かります。こういうふうに調べさせていただいて、非常に勉強になりました。

3年に1回、慰霊祭がございます。ここだけは非常にディープなので、皆さんに見ていただきたいと思ひます。(映像)慰霊祭です。途中で切ります。大切なプライバシーがありますので、ちょっとだけ見てください。背景の音楽は喜太郎の音楽です。これを製作したのは、インディーズですけど愛知産業大学の林和義という監督です。その監督が伊賀にございます昌光律寺でされる慰霊祭を撮ったものです。静止の墨絵を動画のように撮るのが非常にうまいです。最後、龍の絵が出ます。これは月僊といひて愛知県の重要文化財で多分、登録されていると思ひます。本当によくできたものです。こんなお寺が近くにあります。伊賀八幡宮のすぐそば、昌光律寺といひます。相当にさびれています。でも、このお寺を訪ねるだけでも値打ちがあると思ひます。こういう意味では、それぞれの所を発掘していただくと非常にいいかなって気がします。これは本当にお寺の自助努力で一生懸命、直されています。商工会議所の若い人たちが慰霊のための写真を並べて、どういふふうに慰霊するかを、どういふふうに受け取ったらいいかということで、映像化してすごく皆さんに感謝されました。このときにお配りしている名簿が、先ほどの私が作った名簿でございます。ヒアリングをしてこんなふうにと、私のほうでさせていただいております。前の古澤会頭がここに並んでみえます。ここからプライバシーになりますので切ります。

次に商工会議所もちょうど100年というときがございました。この際に、岡崎の100年企業を調査して記念誌を作りましようというアイデアがきました。これはしめた。インタビューをしながら各企業に訪ねられると

ということで、私はさせていただきます。ここにございますのが資料でございます。『100年企業』の冒頭に出てまいりますのがこの2社です。お分かりのようにまるやさんとカクキューさんの2社は、400年ぐらいの記録が残っています。

そして、これがナンバー21まででございます。一番ここで申し上げたいのは、先ほどありました、産業遺産の

岡崎商工会議所登録の100年以上永年継続事業所一覧(増補版)
平成30年7月28日現在 岡崎商工会議所登録

事業所名	事業内容	創業年
1 株式会社まるや八丁味噌	八丁味噌 赤だし味噌製造販売会社	延元2年
2 合資会社八丁味噌	八丁味噌	正保2年
3 丸石醸造株式会社	酒造	1 株式会社まるや八丁味噌 天保3年
4 磯部ろうそく店	ろうそく製造	享和元年
5 株式会社稲花火店	不動態資質	享和元年
6 株式会社永壁	宮内省御用材 瓦葺	天明2年
7 合名会社備前屋	和洋菓子あむ菓子	天明2年
8 有限会社大貫屋呉服店	呉服販売	文化元年
9 杉浦利石材店	石製品加工製造販売	文化元年
10 株式会社杉田石材店	灯籠 石彫刻 石碑等	19 株式会社三浦太郎店 文化11年
11 合資会社柴田酒造場	清酒の製造及び販売	天保13年
12 岩月佛壇店	仏壇 仏具製造販売	天保13年
13 岡崎農機株式会社	農家用機械製造	天保13年
14 有限会社鳥居石材店	石塔・石製品製造販売	天保13年
15 合資会社くすや呉服店	呉服販売	明治2年
16 株式会社中根佛壇店	仏壇 仏具製造販売	明治2年
17 株式会社安藤靴店	靴の製造販売	明治2年
18 株式会社山田洋装店	洋服 和装小物 和装製品販売	明治2年
19 株式会社三浦太郎店	各種和太鼓製造販売 及 太鼓演奏小唄一式	明治2年
20 伊勢屋株式会社	アール・ド・フランス 洋装製造	明治25年
21 有限会社小山久	和弓の矢の製造	明治25年

中で、こんな多彩な産業があるまちはなかなかないです。例えば、少しここで申し上げますと、ろうそく屋さん。磯部ろうそく屋さんがいらっしゃるんですけど、岡崎は2社もろうそく屋さんがあるのです。味噌屋さんも2社ございます。花火屋さんがあります。仏具屋さんがあります。石屋さんがあります。考えてみれば本当にどこのまちなに行っても、こんなに多様な産業があるまちはないのですね。しかもこれが、昨年あったけども来年はつぶれている。そんなことないのですよ。100年以上、延々と続いています。こういうまちの老舗企業の存続理由はといいますと、本当に特徴のある岡崎市だと思います。私はこの

『100年企業』を作りながら、岡崎市はどうしてこういうまちの気風が生まれたかとの考えに及びました。

100年企業誌から見てきことは、岡崎の文化の多様性、もしくは産業の多様性です。非常によく分かります。例えば味噌とか、酒とか、ろうそくだとか、和紙だとか、呉服とか、石とか、仏壇とか、太鼓、弓矢、本当にたくさんの産業がございます。それが、岡崎の文化の落ち着いた姿をつくっている気がします。私たちが多様性を持つ文化のある岡崎市をこれから、どうすべきかという、1色に染めてしまうというのは、あり得ないと思います。多様な産業が同居する、多様な文化が同居する世界をつくっていくのが、21世紀の岡崎です。38万人か40万人ぐらいの都市の使命だと思います。生物多様性と最近よく



いわれます。それから、SDGs といって持続可能性の社会を考える場合に、多様な人が多様なまちで多様な仕事を創造し、維持して生活している。そういうまちの営みが日本の一つモデルになると私は思いました。私は、岡崎は時代の最先端ではないかと書いております。

そんなことを考えていましたら、2年ぐらい前に八丁味噌の地理的表示問題が飛んでまいりました。下段に書いてございます。2017年12月15日に農水省が突然、岡崎の八丁味噌2社を除外して、愛知県の味噌溜醤油組合に八丁味噌の名前を認めると。何でしょうか、これはという話です。詳しい話はまた、2社の社長さんが語ら

れると思いますが、通常考えるとおかしいことです。ところが、これが多様性と経済合理性の相反するところだと思っています。ここは私たちが禰を引き締めて、多様な私たちの岡崎を守り続けるという志が、必要だと思います。これは農水省が認定した八丁味噌と、岡崎伝統の八丁味噌の違いです。私はとやかく申し上げられませんが、ぜひ皆さんにも認識していただきたい。私は、大学でこの問題をやるということで、学長も含めて署名活動をさせていただきました。2社の社長さんに聞きますと、現在は7万通ぐらいある。この前には、行政不服審査会も少し意見を入れていただいたようなことを聞きます。皆さんが意識してこの八丁味噌の問題について考えていただきたい。そういう意味で、大学で研究会を立ち上げたり、NHKで取り上げていただいたり、セミナーをさせていただきました。一番重要なのは、2番目に書いてございますけども、一般市民の方や学生の皆さんに、この問題は何なのだろうかということ、岡崎市とともに生きる私たちとして、考えたいということが趣旨でございました。まとめとして、私が今ずっと述べてまいりましたけども、岡崎と対話をしながら得た知恵というのは、こんなふうにとまとめることができます。一つは、岡崎の観光は世界の平和を求めること。これは、後で味噌六太鼓が出てまいりますけれども、私たちは得てして平和というのをなかなか語り得なかったのです。若い方は徳川家康というよりも、徳川家康が達成した平和というものに関して非常に敏感に反応してくれました。そういう意味では平和を希求する、もしくは世界の平和を岡崎からというのは非常にスローガンとしては素晴らしいと思います。それから2番目は、岡崎の観光は日本のため、世界のための大仕事。本当に平和を考えるならそうだと思います。先ほど須田先生も言われたように、ネットワークです。平和とか、醸造文化とか、いろんな意味でネットワークができます。そういう意味では世界の仕事になると思います。

私が、取り組んでいます祭りに関しては100年という計画の中で取り組むべきだろう。それは同時に志ある人物、岡崎人と多分、深田さんは言うのでしょうけども、その人たちがふつふつと出てくる必要があります。岡崎には多様な老舗、地場産業、産業遺産が存在しています。乙川沿いに昔のガラ紡の遺跡がずっとあります。だんだんなくなってきています。皆さんも関心があれば、そういう遺産も近代遺産として残っておりますし、ぜひ関心を持っていただければと思います。

それから6番目、文化産業の多様性を認識し、守り育てることが大切です。私はいろんなものを作らせていただいています。多様性は岡崎が落ち着いたまちである、一つの理由です。これが1色になれば、何となく帰ってきててもがさついた自分の気持ちになるかもしれません。

そして最後、八丁味噌問題というのは、解決する、解決しないという問題の前に、地域や、伝統や、多様性に関心を持っていただく一番いい機会です。ですから、ぜひ皆さんで八丁味噌問題を、何なのだろうかと考えていただく、機会にさせていただければと思います。

最後に私が岡崎城下家康公夏祭りの実行委員長をしているという紹介がありました。少しその辺のことで具体的に公民連携による活性化についてお話しさせていただきます。昭和23年に観光夏祭りが始まりまして、それから平成24年に民間に移管されて開催されるようになりました。現在は岡崎城下家康公夏まつりで、平成25年度からこの名前でやっております。こういうふうに最初の頃は手作りで学生と一緒に作り、市民の方々いろいろなものを作る。三菱自動車さんの応援を得ました。第1回目の岡崎城下家康公夏祭りでは、船のこういうねぶたを作りました。



テーマも毎年変えて、皆さんに理解をして夏祭りに入っていたきたい、そういうことで頑張っていました。改善もしました。例えば、そこに書いてございます、1番目の岡崎の歌の本格化ということで、今までの伴奏はCDで回していたものを全て生演奏でじかたさんにしました。渡辺傳次郎先生が一生懸命、自分たちのお教室の生徒さんを連れてきて生歌でやられている。それから、岡崎の踊りも輪踊りじゃなくて本格的な踊りにしようってことで、これを工夫する人が出てまいりました。それでも、実は実行委員長の私の悩みは続いていました。みんなが言うのです。この祭りは100年続くかな。来年もやれるのかな。38万都市の岡崎の夏祭りって何だろうかな。こんなことを言われると、困ったなってなります。誰も解決はできないと思います。でも、考え続けていると、ふと新しい人が出てくるのです。

先ほど100年企業と言いましたが、そんな中にナンバー19という所に三浦太鼓店という太鼓屋さんがあります。小さなお店です。そこに6代目で1980年生まれですから、かれこれ39か40ぐらいの若者がいます。彼が5年ぐらい前から、実行委員会に入ったときにすごく変わるようになりました。なかなかイケメンで、先ほどちょっと別の所で話してまいしたら、みんなが集まると、彼がいるとみんな女性がそっちを向くというぐらいイケメンだそうでございますけど、私は彼と付き合って本当に思いました。夏祭りのいろんな問題とかいうものに、非常に現実的じゃなくて継時的にしなやかに対応して、新たな岡崎愛、もしくは志を私たちにを見せてくれたような気がします。ある意味で、先ほどの臥雲辰致みたいな形で、どこかか



ら来た異星人のまれ人かなという気がします。八丁味噌と何かの掛け合い、連携、応援という企画の中で、岡崎まぜめん会さんが八丁味噌と麺、もしくは岡崎市さんの企画課が八丁味噌とカルピスをやってみえます。ところが三浦和也氏は祭り、太鼓と、八丁味噌、この掛け算をするのです。祭り、太鼓ですので、基本的には祭りで太鼓をたたいて、味噌の何かを食べると思います。ところが、彼はこんなのを作ってしまったのです。味噌を100年以上醸した味噌の桶を太鼓に仕上げたのです。これ1号機、2号機といいます。



ここに集まっている人たちは、瀧山寺の山田和尚の所のお許しを得て、2月から7月ぐらいまで1号機を作り、また、翌年2号機を作る。そして、担ぐための棒は額田の山で採ってくるということをしました。これが、私が一番感心したことでございまして、三浦くんだけじゃなくてつくった味噌人会の人たちが、作った平成30年度味噌六太鼓実績報告書なのです。こういうのを作れるようになっていただいたのです。自分たちのブレークスルーをまとめていきます。それをご紹介します。

一つは平成25年度から岡崎城下家康公夏祭り実行委員会の本田秀行氏と協力し、伝統、絆、体験をキーワードに各地域の祭礼を調査し、研究してきました。研究をする若者がいるのは、ものすごくうれしいです。お祭りは多分、そのくらいのことが要るのだと思います。彼らが研究してたどり着いたのはこのお祭りです。中に太鼓が入っているのです。四国の大太鼓祭りといいます。新居浜とか、土居とかでやってみえます。これをみんなで担ぎ上げる。この瞬間の感動が自分も入って、絵にも言われぬ感動だったということで彼らはそれから一緒になって、平成29年度八丁味噌仕込み桶大太鼓プロジェクトを始動する。これから伝統的食文化の八丁味噌を100年醸したもので、直径6尺の巨大な味噌仕込み桶を再利用して太鼓を作る。そのときに郷土の職人さんたちの協力を得て、郷土の英雄である徳川家康の三つ葉葵を描いた味噌六太鼓を完成させた。そして、担ぎ上げるために額田地区の丸太4本、約2トンを結び付けて、岡崎城下家康公夏祭りで担ぎ上げた。それだけじゃなくて、彼らは同時に平成30年3月6日、市民組織の味噌人会、みそひとかいと書きますけど、実は味噌屋さんの記録にみそひとと書いてみそろくと読むようなところがございましたので、味噌人会を発足させて、維持する組織を考えました。非



常にマネジメントもうまいです。三浦くんは自分で零という太鼓の楽団も運営しています。そういう意味では、私たちが考える以上にブレイクスルーと同時に経営センスもあるのかもしれませんが。

2台目はこんな日程です。大体、2月から7月、瀧山寺とカフェ柚木。これは額田のほうでございます。そして、延べ350人。こちら300人ほどの人々が協力してやっております。三浦さんが語る八丁味噌と味噌六の太鼓の共演は桶作りから始まる。桶は、この前まるやさんが何台かお買いになったと新聞に載りました。でも、堺のほうでしたかね、もう、味噌を造るための味噌桶はもう作れないと。どうするのかという問題ですね。みその桶を作る人がいなくなったらどうするか。そしたら、三浦くんはこう考えたのです。自分たちで作ろう。箍(たが)から作る。そして、桶職人が消えゆく中、技術の伝承が実現する。岡崎だけのオンリーワンの伝統文化食である八丁味噌を仕込んだ、岡崎だけのオンリーワンの太鼓ができた。そして、これは消えてなくなったようなものがございますけども八丁味噌の歴史を学ぶことによって、文化遺産の味噌仕込み唄を復活できた。そして、ここがいいです。自画自賛じゃないですけども今後100年、市民に愛される岡崎の宝ができたというふうに彼らは言っております。踊りについてもこれを囲んで岡崎を踊る。そして、郷土愛を育む。地域が活性化する。そして、岡崎を象徴するシンボリック的存在になった。ご存じかもしれませんが1月1日、新年交礼会がございます。あの脇に味噌六太鼓が鎮座しています。ああいうふうにどっかから呼ばれるようになって、岡崎を象徴するような存在になる。

そして、8番が先ほど須田先生が言われたことです。全国各地の醸造、発酵文化の中で使用された桶の、全国サミットをやったらどうだというのを彼が考えたのです。私たちは、発酵文化、知多に負けるなと思うじゃないですか。私も実際、10年ぐらい前に知多に行きました。盛田酒造に行ったりして調査をしていました。そしたら、「もっと勉強して来なさい」と言われた。この三浦くんが発想すると、いろんな発酵文化の所がございます。そのサミットを、太鼓を使ってやろう。お酒でもいいよ、味噌でもいいよ、たまりでもいいじゃないかという発想。これがネットワークです。ただ単に岡崎だけじゃなくいろんな所の、例えば大きな所、小さな所含めて、そういうネットワークをつくっていったら、それが同時に食の文化を支えている醸造文化、発酵文化の支援と同時になる。ようやく私は、分かってきたのが、深田正義さんが言った、岡崎が観光に動くとき世界の平和につながるよというのがこれかなという気がします。

まとめますと、祭り、太鼓、八丁味噌のすてきな出会いというものは、食文化を生かした公民連携による地域活性化です。それから、上のほうは見ていただければ分かりますけれども、実行委員長としてはこんなことが言えます。若いも若きも、男性も女性も全員が準備から本番まで参加できるモデルができた。祭りといふといかつい人たちだけといふか、例えば男性だけとか大人だけではなくて、みんなが参加できるようになった。それから、絆と平和への祈り。これは、私は本当に考え尽くした。平和を祭るといふ意味で、祭られるといふ意味で、神ににぎわいていただくという概念が多少ございます。神様の直前じゃなくて少し離れた所でお祝いをする行事としては、私は泰平の祈りを、11月23日の土曜日に行います。LEDの球を流します。泰平の祈りという言葉は岡崎全部を一つまとめて、世界に発信できること。今年から岡崎市観光推進課には家康公係ができました。家康公係の方はぜひこれを理解して進めていただければという気がいたします。

もう時間がそろそろきますのでまとめに入りますけど、食文化を生かした公民連携による地域活性化で、味噌六太鼓という八丁味噌仕込み桶太鼓プロジェクトは、岡崎モデルもしくは八丁味噌モデルとして多様な文化との連帯と、全国、世界、もしくは多様な文化に注目し産み育てた環境を守らないと、多分つぶれてしまいます。その辺のところで蔵屋敷とか出るとも思いますけども、それも含めて環境保全をしたらどうかという気がいたします。皆さん、お手元にパンフレットが多分、届いていると思います。八丁味噌の味噌六太鼓です。これの製造過程、それからいろんなことが書いてございますので、思いが届くと思います。一読願えればと思います。裏面では、みそ仕込み唄があります。復興版です。後で聞いていただきますのでよろしくお願いします。

私のほうは終わりました、ちょっと実写を見ていただきます。一つは平成 30 年度味噌六太鼓の制作過程。子どもも大人もみんな一緒になっているところ。それから、最後に 10 分ぐらいみそ仕込み唄を少し聞いていただいて、太鼓の演奏もお聞き願えればと思います。

平成 29 年、100 年以上使われた八丁味噌仕込み桶が、新たな岡崎の象徴として味噌六太鼓台へと生まれ変わりました。翌年の平成 30 年、味噌六太鼓 2 号機の製作が始まりました。

やってみえる中心的な人物が、2 名出てまいりますのでご紹介します。出てきていただいて準備してください。本多さんと伊藤さん、どうぞ。



ぜひ今から味噌六太鼓は、味噌の匂う、岡崎の味噌を 100 年仕込んだ音を聞いていただきます。それじゃ、このマイクロホンをお渡しします。

皆さん、こんにちは。お手元にこのパンフレットがあると思うのですが、味噌屋九十日よ、月なら三月よって歌います。その後にくらしよって僕らがいいです。その後続けて、こだまでくらしよって返していただきたいと思います。分からないと思いますので、僕が 1 番だけ歌わせてもらいます。それで、くらしよって言いますから、くらしよで、返していただきたいと思います。よろしく願いいたします。

味噌屋九十日よ、月なら三月よ。くらしよ。

一同 くらしよ。

ありがとうございます。でも、もうちいと大きい声で入っていただけると、勢いが出ていいと思いますのでもう一回、くらしよ だけ言いますので くらしよ 返してください。

くらしよ。一同 くらしよ。そうです。よろしく願いします。じゃ、歌います。

() 味噌屋九十日よ、月なら三月よ。くらしよ。一同 くらしよ。

() わしが鳥ならよ、味噌屋の屋根でよ。くらしよ。一同 くらしよ。

() 味噌六恋しや と、三声鳴くよ。くらしよ。一同 くらしよ。

皆さん、ご一緒に、よー とお願いします。いきますよ。よー。一同 よー。

本多さん、伊藤さん、ありがとうございました。

もう一度、大きな拍手を、お願いします。私はこれで終わらせていただきます。本当にご清聴ありがとうございました。皆さんのご清聴に本当に心から感謝します。でも、ぜひ味噌六太鼓、また、来年の夏祭りもやりますし、いろんな所に出ますのでご協力いただければと思います。どうもありがとうございました。

第3部

パネルディスカッション

郷土食の八丁味噌造りの歴史文化資産を生かしたまちづくり
の新たな展開





【加藤】 加藤でございます。代役です。一昨日、正式に承りましたので素振りもしてなくていきなりピンチヒッターでバターボックスに入ったような感じではありますが、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。また、内臓の中に先ほどの味噌六太鼓の音の残響が、残っているような感じですけど、今日は、先ほどご講演賜りました須田先生、あるいは吉田先生、八丁味噌を造っておられます早川さん、浅井さんと共に郷土食の八丁味噌造りの歴史文化資産を活かしたまちづくりの新たな展開について一緒に考えて、意見交換を進めていきたいと思ひます。今日のシンポジウムのテーマとしましては、お手元にありますように郷土食の八丁味噌造りにみる歴史的な風情を磨くということであります。皆さんご承知のとおり、八丁味噌というのは岡崎を代表する伝統的な地場産業である。岡崎の特産品として全国各地のほうに出回って名高いものになっております。また、味噌というのは日本人の食生活に根差した食文化の一つであって、八丁味噌は毎日食卓に欠かせないふるさとの味となっております。おそらくご年配の方は朝みそ汁を飲まないとい日の活動が始まらないようなそういう方だと思ひます。

随分昔になりますけども、アフリカの、ケニアとかウガンダのサバンナ地帯に遺跡の発掘調査に参加したことがあります。そうすると朝起きてみそ汁が飲めないのが本当に、あー、みそ汁が飲みたいなという思いがあって、寝ていても飲んでるような夢が出て来たような、そういうことがありましたけど、そういうことでも日本人の中には、このみその味と言いましょうか、みそ汁がしみついていてと思ひます。それで、きょうのテーマの八丁味噌は岡崎の二つの老舗が江戸時代から300年以上にわたって、今も変わらない伝統的な製法を守り、味噌蔵で時間をかけて醸造してできているものであります。皆さま行かれたと思ひますけど、八丁蔵通りとか八帖住還通りを歩いてみますと、ほのかにみその香りが漂ってきまして、歴史的な建造物である蔵が続く蔵並みというのは、歴史的風情を感じる大切な非常に重要な場所になっているかと思ひます。岡崎市内は戦争で主要な市街地が焼けてしまいましたけれども、歴史的な建造物が今もこの狭い範囲の中に集中して存在しているのは八帖地区だけではないかというふうに思っております。戦前ですか、文芸批評家の小林秀雄という人が歴史というのは上手に思い出すことであるというようなことを確か書いていたと思ひます。われわれはこの八丁の先ほどの蔵通りとか住還通りを歩くと、少しはですね、江戸時代だとか明治初期のことが、歴史が思い起こされるようなそんな感じの風情を整えている所です。岡崎市の統計に

よりますと、昨年度の平成 30 年度に味噌蔵を訪れた方は 2 社を合わせて 23 万人となっているようです。これは岡崎城の天守に入られた方が 18 万人くらいということですので、それよりもずっと多い方が訪れておられます。どちらも入られた方もあるでしょうし、天守には入らなくても岡崎公園に入られた方、もっと多いかもしれませんが、いずれにしても八帖地区というのは岡崎市を代表する観光地であると言っても過言ではないと思っております。そこで、これから 4 名の方と意見を交換しながら、郷土食の八丁味噌造りにみる歴史文化資産を活かしたまちづくりの新たな展開というテーマで意見交換をはかってまいりたいと思います。

まずは最初に、八丁味噌造りという伝統的な生業や八帖地区の自然地形、矢作川、気温や湿度などの自然的な特性、そして味噌蔵の蔵並みがありなす、建造物からなる歴史的環境を活用して、それらを観光や地域活性化のコンテンツとしてさらにブラッシュアップしてく。磨き上げるために取り組んでいくべきことについて伺いたいと思います。始めに吉田先生、先ほどもいろいろ太鼓等通して人間の絆をつくるというようなことを説明していただきましたけど、八帖地区のさらなる地域活性化のためには今後どのようなことに取り組んでいくべきかお話しいただければと思います。

【吉田】 はい。先ほどは拙い講演を聞いていただきましてありがとうございます。今のご指名ですので私のほうから八丁味噌さんの所、それから八丁蔵通りの所をいろいろなところで学生と訪れている中で感じたことを 3 点ほど、ご説明申し上げたいと思います。一つはですね。先ほど三浦くんが言い出したオンリーワンの太鼓、そうです。その通りです。私は自負していいと思いますね。ただ、個性とかオンリーワンというのは同時に他者との同一性とか差異性、違いとか共通性が見えてまいります。そういう意味では、また別のところもオンリーワンを言う。そういう意味では連帯という視野を少し広げて、ああいう行事もそうですし、味噌屋さんの発酵文化もしくは醸造文化が共通なそういう博物館、私は、たまたまカクキューさんのほうに学生を連れて行ったときに新しい博物館のような施設ができていました。そういう意味ではやっぱり発酵とか醸造に関する歴史的なそういう技術も含めて、少し博物館のようなものもできて体験もできて、それで 1 年後には味噌がもらえとか、そういうのがあれば非常にいいかなというのが一つの提案でございます。それから二つ目はですね、これは私が学生と大樹寺から岡崎城に至るピスタラインを歩いて来て、最後に八丁味噌へ行きます。学生は岡崎公園ではお土産を買いません。自由に散策してくださいと言っても買いません。ところがなぜかしら、八丁味噌に行って最後ガイドさんが、みそアイスクリームがありますよと言うと食べるのです。それは、やっぱりおもてなしの心が十分に、八丁味噌 2 社さんにはあります。私は八丁味噌 2 社さんの努力は十分買いますので、むしろ八丁味噌のあのおもてなしがもう少し他の施設であればなあという気がします。例えば石工文化があるようなところに寄れる。もう少し行ったらろうそく屋のような、回遊できるおもてなしのお店でもいいです。八丁味噌さんは十分、独自産業みたいに自分のところのみそを消費するようなお店もつくってみえますので、そういう意味で私は今のままで十分です。観光も十分です。だけど、どっか別のところもう少しあるといいかなという気がします。

最後にこれは須田先生がいらっしゃいますのでぜひご協力お願いしたいのですが、私が学生を連れて歩いていますと、最後、先生、帰るときどこいくのと言うのです。八丁味噌で解散と言うと、東岡崎、中岡崎、愛環、はなかなか電車来ないよってなります。ですから私が思うのは、愛知環状鉄道と岡崎公園前の駅を、先ほど市長さんがお話されていましたが、岡崎中央駅にしてはどうでしょうか？ そんな意味で八丁味噌蔵通りからこちらのりぶらや、お城に来られて、東岡崎から回れる電車とまちの回遊路がいいですね。そういう大きな改革をしていただくと私はほんとにあそこの所に回遊路できる気がしてまして、たまたま先ほど

市長と須田先生のお話を聞いて思いました。また何か可能性があれば教えていただければと思います。その3点ぐらい、お願いいたしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【加藤】 ありがとうございます。確かに先ほど舞台裏で須田先生が市長さんに話しておられましたけど、実際には非常に難しいという、鉄道のご専門の須田先生から、いろんな難しい問題はありますよということですが、そういう熱意は本当に大事にしていくことだと思います。それでは、八丁味噌をつくっておられるお二人の方に伺っていきたいと思います。まずカクキューの早川さん、どうして八丁という土地でみそ造りが行われるようになったかの歴史、そして、あの通りを歩いていくと石垣とか格子の付いた外観の蔵が建っております。これは、何か意味があるか？八丁蔵通りとして蔵並みが知られているのですが、蔵の修理とか維持管理については大変な労力とか資金とかが必要ではないかと思います。本社棟と資料館は平成8年に国の登録文化財になっておりますけど、あれは補助なんかないのではと思いますけど、維持管理、修理等が大変だと思います。日頃からこの維持保全について心がけておられることとか、気を遣っておられること、蔵通りに景観について文化財の所有者として、また、味噌の生産者として、思っていることがあればお話しただけるとありがたいと思います。

【早川】 はい、早川と申します。よろしくお願いいたします。八丁蔵通りという名前が付いていますが、私が子どもの頃には光圓小路という通りでした。光圓寺というお寺さんが裏にあって、その小さい小路というので光圓小路と呼んでいました。矢作川がすぐ近くにあって、昔はよく洪水を起こして氾濫したので八丁蔵通りの所はみんな大事な建物は2メートルくらいの石垣の上に立っております。だからこの間の千曲川のように、3メートル、4メートルと言われてしまうと、もうだめでしょうけど、昔のご先祖は2メートルの石垣を組んでくれました。八丁というのは矢作川とうちの名前がついた目の前の早川と伊賀川と、いっぱい川が周辺にあって、湿地帯というか湿った所のイメージがあります。そこで味噌を造るのはなかなかいい味噌ができなかったというのを聞いております。

そこでご先祖が試行錯誤して、今の作り方の味噌にたどり着いたと思います。味噌を出荷するのにも昔は鉄道も車もありません。矢作川の八丁土場というところから出荷して矢作川を舟で下って、吉良・西尾のほうの三河屋に行って、大きい舟に積み替えて江戸に持っていった。それと西尾の吉良の塩を、船が持って上がってくる。それからピラミッド状に積んである味噌石は上流のほうから下ってくる舟で積んできた。燃料も薪も一緒に積んできたということで、東海道もありますし、川もあって味噌造りするのに大変条件が良かった。そして、いい水がすごく井戸から出たということもあって。ただその洪水が一つ問題だった。味噌ができるまでのいろんなものが要素として含まれています。

土蔵をたくさんご先祖がつくってくださったのだけでも、景観を維持していくための建物の維持というのがまた今、大変な問題で味噌を売った利益の一部をまわして、あれを維持している状態で、長くはできません。土蔵ですから雨漏りとか漆喰がはげたり、いろんなことがあり、今年も昨年も、台風が強かったものですから、瓦が何枚か飛んだり、家が倒れたり。いっぱいこれからも被害が続くと思いますし、そういうものを全部直していくと大変だなと思っております。あそこは、景観環境条例で市の補助金の対象になっているのですが、実際にはお金が出ていくので、今後は一生懸命に残してくれた遺産を守っていきたくて思っております。味噌もまるやさんと一生懸命に売って、利益を出していかないと維持もできませんので頑張っていきたいと思っております。ありがとうございました。

【加藤】 ありがとうございます。国の登録文化財になっていて補助でないですね。

【早川】 あんまりお金は返ってきてないですね。ただ登録文化財は聞くところによると、本当の文化財はあまり手がつけれないので、逆に自分たちのいいように使えない。そんなものはいらないということで結局壊してしまうので、国としては、ゆるい登録文化財を作ったと聞いております。というのは、外観をいじってはいけないが、中はどういうふうに改造してもいいでしょう、というふうに聞いています。お金が入ってくるというのは市の補助金のほうが多いですね。

【加藤】 市は補助を出していただいているので、これからも続けていただきたいと思います。それでは続きまして、まるやさんの浅井さん。いろんなことをお考えだと思いますが、お伺いしたいのは、八丁味噌は伝統的な製法に非常にこだわって、これまで味噌造り続けて来られたのですが、その理由とか、全国に他にもこういう味噌などの醸造業に携わっている方はいろいろあると思いますが、味噌は、いつも改良、改良、改良と変えていかないと、ユーザーに合わないとか、需要もたくさんあると思うのですが、味噌造りの特にこだわっておられるところ、それから他の味噌造りと比べてどこがどのように違っているか。そして伝統的な製法を続けていく上で困っていること、大変なことはどんなことがあるかをお話しいただければと思います。

【浅井】 はい、分かりました。私は、まるや八丁味噌の浅井信太郎でございます。今、加藤先生からお伺いしましたが、この岡崎に2社、この八丁味噌の蔵があったということが非常に大きな理由だったと思います。皆さまよくご存じの東海道の北と南に二つの蔵。カクキューさんが北側に、私どもが南側に。少なくとも江戸時代初期から、2軒があり続けた。ある意味ではライバルであるけれども非常にいい関係、いいパートナーであったことが、先ほど早川さんが言われたように、建物を残す、品質を残す、そして八丁味噌というものを残すというのが二つの蔵とともに、非常に強い意欲につながった。確かに内容は、今も金銭的には大変苦しい状態をずっと続けているわけですが、そういう環境が非常に良かった。つくり方が先ほど早川さんが同じように言われている、先祖がこのつくり方を確立されて、今日まで続けてこられた。この続けることにおいてもライバル心が多々あったのではないかなと思います。

そこで木桶職人がいなくなると言いましたけれど、それでも2社は木桶を作り続けて、今年度も作り、来年度も3本を既に予約をしてあります。来年度は、箍(たが)はなにがなんでも竹箍でお願いし、了解をもらっています。確かに注文しなければ木桶職人はいなくなります。注文してその職人を残す意欲があればきっと作る人もいるだろう。味噌六もそうなのです。小豆島にもそういう方がいらっしゃいますし、少なくともこの2社はこの木桶を発注し続けること。そうすればなんとかなる。少なくとも私どもはその表現をして、いい価値が生まれるということを訴えれば、桶職人も残れるだろう。桶は六尺桶と言います。味噌は6トン前後。6トン強が入るわけでありましたが、この2社の桶はいわば特注品であります。というのは通常の醤油あるいは豆味噌に比べて大きく違うのは、味噌の上に味噌の2分の1の石を乗せる。これが3トン強ありますから、合計で10トンになるのです。10トンを支える桶の底板が、他の豆味噌や醤油とは違います。私のところの底板を1本皆さんに見てもらおうと思っておりますが、10センチ強の厚みがあります。これで私が十数年前に発注したときに断られたのですが、断ってそれから始まったわけです。

私たち2社はその需要を作り続けて、注文し続けていることが大きな原動力です。

そこに使う原料が、大豆と塩ですけれども、もちろん三河の大豆を使いますし、特に江戸中期から後期にかけては、ほぼ半分以上はおそらく江戸へ運ばれたのだらうと思いますから、その帰りに上州の大豆をこの

矢作川にそってこの岡崎に運んできております。それを昔で言うなら足かけ3年、今でいうなら二夏二冬、必ず熟成させるという、2社は特に約束事があったわけではありませんが守っていた。何とか工夫をしてもう少し原価安くしようとかですね、いろいろ工夫をするのですが、そういうところにこの2社は頭を向けなかった。どうすれば早くできるのだろうか、ということに向けなかったということが、ライバルでありいいパートナーだったのだらうと思います。それが今日まで続けられている。今日もそうなのですが桶を新調するという争いをやっておりますし、石をきれいに積むということもやっておりますし、完全熟成させる2年、二夏二冬熟成させて、そして無添加の状態、殺菌もしないしアルコールも加えないし、生で出荷するということを務めている。

そして、もちろん地元三河の大豆を使うということを特に打ち合わせしたわけじゃないですけど2社ともやっている。お互いが市場を取り合うわけでもない。2社合わせても、たいした量ではありませんのでお互いが争うようなそういうものはありません。品質ではあるいは衛生では共に上げようという努力をしている。これが2社のいいところかなあとと思います。私たちのやりがいと言いましょか、私のあとまた次の人が継いでくれるのでしょうか、そういう思いの人たちが継いでくれるといいなと。もちろん岡崎の市民の人がそれを理解して、立ち寄っていただけて続けるといいな。ちょっとずれてしまいましたがそんなことを思います。

【加藤】 ありがとうございます。2社がライバルとして300年近くも続いてきたというのは、やはりライバルがあるゆえにお互いが発展と言いますか、切磋琢磨したというか、そういうようなことを思い浮かべます。味噌をつくるのに二夏二冬というのですね。丸2年でしょうか。この長期の熟成をするとか、花こう岩の大きな石を重石として使うというのを伺ってまして、教育というか、さっき須田先生から人づくり、人材づくりという話がありましたけど、これを聞いていて人づくりのことを考えたのですね。人間を育成していく上には、じっくりやっていかなければいかんということと、それからある程度の重石とか負荷を与えると、子どもの中から反発する力って言いますかね、押しのける力、それが、最近では学校では生きる力と言っていますけど、生きる力を生むということを以前学校教育に携わったことで思い出してとても興味深く、味噌造りを思い浮かべました。それでは須田先生に先ほど非常に詳細な説明をしていただきましたけど、産業観光など観光の視点から改めて八丁味噌をご覧になってご意見を承れるといいなと思っています。

【須田】 須田でございます。私は鉄道屋でございますから、どこに行くときでも大体鉄道をなるべく使うようにいたしております。従って、今日も東海道線と愛知環状鉄道で名古屋から参ったわけでございますけども、その場合、私はいつもですね、こういう目的地に至るところの地図を拡大したものをとってもらって、これを見て来るわけでございますが、これを見てちょっと驚きましたのはね、このところに赤い点、青い点いっぱい付いています。赤い点というのは大体これは観光客が入るようなホテルとかレストランのようなものが全部これ赤で書いてあります。青は観光施設と言いますか、要するに見どころでございますね。これ見ますとね、大体、国道1号線と名鉄本線、それから今度は逆に矢作川と岡崎公園の間、これに囲まれた四角い所、つまりこれの中心にあるのがいわゆる八帖地区ですね。

この範囲の中にもものすごくたくさん入っているのです。こんなに同じような地図が全国出ている地図の一部でございますからこんなに凝縮されたことは見たことがありません。この中に自分が見たところはいくつあるのか？ほとんどないのです。せいぜい八丁味噌の郷程度であります。あるいは岡崎公園程度であります。他にいっぱいあるのです。これを見て驚きました。つまりこれまでわれわれは、岡崎の観光と言いますか、岡崎に参りましたときは、所要があって市役所行ったり、こういう所へ来ましたり、岡崎公園見たり、

八丁味噌の郷を見たりいたしますが、点でものを見てきたことを反省いたします。これだけのものがこの区間に、囲まれた四角の間に凝縮されて並んでいると、気がつきませんでした。もっと見ておけばよかったなあという反省をしております。

要するに、こういうものを見なかったために、点の観光でしかなかったわけで、面の観光であることに気が付かなかった。これ全部回ったら1日でも何日でもいられるぐらいのものがある。少なくとも来た時には2、3カ所見て帰ると印象が違っていくと思います。そういう意味での情報の出し方、あるいはストーリーの作り方と申しますか、そういうことが私は、発見いたしまして、驚きました。従ってこれからこの地域の観光というのはこの地域を中心にして点から面の観光をしていくことが大事じゃないかと思えます。その中心になるのはどうもこの八帖地区じゃないかと思うのです。この北の方と言いますか1号線から名鉄本線までの間と矢作川と公園に囲まれたこの区間が一つのブロックだと思います。これ以外にももっと他のブロックが岡崎市は広いですからあると思えますけど、私がきょう発見したのは、そのブロックであります。真ん中を248号という国道が通っているわけです。非常にこの道路は発達しております。また間がそぞろ歩きできるような位置も私はいくつか発見したように思えます。これからは、そういう観光をしようと思っています。

さきほど場内においでのお客さまの中から、参考までにということでもいろいろお話を聞いたのでありますけど、その方は八丁文化というようなことをおっしゃっていました。さっきお話がございましたけども、岡崎公園前の名鉄の駅と、中岡崎の環状線の駅です。この駅の名前も八丁を付けて岡崎八丁駅にしてはどうかというご提案がありました。残念ながら私はJRでございますので、この両方鉄道になんの権限もございませんのでお伝えするしかできませんけれども、そんなアイデアもございました。それも一つ。やはりこの地域のものをまとめて、駅は一つにして、同じ所にあるわけですから一緒にすれば階段上がったたり下りたりするのが減りますから便利になります。そのようなご提案があり八丁というものを、八丁文化のように捉えてみたらどうかというお話がございました。私のお話した、広域観光と非常に議論が合うわけでありまして、地元の方にもそういうお考えがあるのだなあと思えました。これからもう一度、岡崎の観光を八丁文化という、この辺一体の四角い地域を中心にして、見直していったらどうだろうか。そうするとそこにありました八丁味噌のこれまで果たされた役割。そして、お城と味噌蔵の間800なんメートル、さっき市長さんがおっしゃったけれども、その間がもう少しうまく結びつけば、大きな一つの観光の中核なるのではないかと。私は、そういう観光の設計をし直してみたいなという感じがいたしました。

その中で、やはり大きな柱になるのは1番矢作川寄りにあるところの八丁味噌のご両社であり、岡崎公園であろうかと思えます。その間にあるいろいろのお店、食の観光だけでもここにいろいろ食事がございます。あんまり申し上げますと広告になりますから、名前は申し上げませんが、例えば何とかお食事所とか、いろいろたくさん書いてございましてね、回りたいなと思うところがたくさんございます。何とか本店とかね、とにかく発見はさせていただきました。

従って私はこういう意味で岡崎のこういう面の観光、八丁文化というところから捉えるという地元の皆さまのご発想を生かして、一つの観光資源づくりをしてみたい。今日ここにきてそんな感想を持ちました。私はまだ勉強が足りませんので、勉強して、岡崎市のこういうゾーンが他にもゾーンがあるような気がするのです。城下町でございますから。それも自分で探してみたい。こんな気持ちになり、認識を新たにして、今日は伺った次第でございます。

【加藤】 ありがとうございます。地元において暮らしていると、良さが逆に分からないということもありまして、今須田先生みたいに俯瞰的にみた場合に、ここにこんないい要素があり、それでストーリーをつくって結びつけていくと面的にも魅力あるものになるではないかというようなお話をいただいたと思います。先

ほどから出ておりますように八丁味噌は工場見学ができますし、飲食も可能ですし、蔵通りの魅力的な景観もありますし、東海道とか矢作川の橋も近くにあって、「プラタモリ」じゃないですけど、ぶらぶら歩いていくと感のいい歩きができるような所であります。さらにこれから多様なコンテンツの可能性について、このエリアが現在抱えている課題について伺っていきたいと思います。先ほど早川さんからはいろいろ修理や管理に結構予算がかかるのですよ、というお悩みもありましたけど、その他何かありますでしょうか。早川さん。

【早川】 お金がかかるのは当たり前で、何とかそれを復元して後世に伝えたいと、残したいと思っています。さっき文化の話をしたときに、たまに、伊勢神宮行くのです。そこのおかげ横丁をみると素晴らしいので、うちの八帖地区も味噌屋2軒から神社とお寺があって、古いまちの建物まだ少しは残っているので、名前はなんでもいいですけど、ミニ版で岡崎のおかげ横丁、八丁文化村でもいいし、将来のそういう手がかかりを今つかんでおいて、スタートすればいいのかなと思います。岡崎商工会議所に匠の会というのがあります。その昔から伝わっている岡崎市内の伝統工芸か食品の会があるのです。匠の会のメンバーが八丁に店を出すとか1軒借りるとか、古民家再生であんまり手を入れなくても、ちょっと直すだけで、よくそのまちのニュースに出てくる居抜きですかね。大改造せずにカフェにしたりするのがあるのだけど、匠の会の匠の技をもった人たちが、そこを使ってまちを活性化する。岡崎でできるかちょっと分かりませんけど。

【加藤】 はい。さっきの、匠の会の技術を利用して再利用と言いますか、そういう話がありましたけどあの辺りって空き家みたいのも生まれつつあるのですか。

【早川】 しっかり把握はしていませんが、壊して空き家というか空き地が少しずつ増えてきている。うわさによると、どっか名古屋の不動産屋さんがたくさんあの辺の一画を買ってマンション建てるという話があったのですが、あそこの八帖地区は高さ制限があります。この間もマンションが建つとって猛反対したのですが、高さ制限と、木下さんが担当でやられたのですが、岡崎市が条例をつくって色だとか、外観の制限を全部やってあるので。うちの工場もちょっとひっかかりそうになったとかって言われたのですが、そういうもので抑えてあるので、マンションが建つことは、まず、今はないと思います。だから空き家というか空き地の問題もどんどん出てきている。確かに古い家並みを残すにはお金がかかるし、住み手がいなくなってしまうらどうするのか？全国共通の話題ですけど八帖地区にも問題があると思います。

【加藤】 そうですね。都会の中の空き家、空き地というのは全国でいろんな所で問題になってしまっています。だからこそやっぱりまちづくりという考え方でみていく必要がある気がしますが、浅井さんいかがでしょうか。

【浅井】 早川さんが述べられたことに、加えてですが、岡崎市は景観条例というものをつくっていただきました。それで市としては、最大限この地を守ろうとしてもらっています。確かに大きな建物は建てられなくなっていますし、本当にありがたいことです。市が大変いろんな助成をしてくれてもいます。金銭的にもあるいはその他のいろいろアイデアでも、私も、ものを作るのに、木下さんに、どうしてやったらいいだろうということを相談したりしています。ある意味で非常に指導、援助が私どもの地区にもらえている。

それは、そこにいとあんまり恩恵を感じないかもしれませんが、振り返ってみるとすごくやってきている。それで沢山の建物が今になって前に戻すような、非常にいい姿をつくられたので、私もそれを、まね

をして追いかけていこうと思っています。内部の整備と外の方がみえたときに喜んでもらえる建物づくりに、少しずつ着手したいと思っています。もちろんそれには、費用がかかります。それは企業人として義務でもありますし、私たちがしなきゃならないことでありますので、そういうところにお金を分配して、来てもらったときにいい地域でいい地区でいい通りに来たなというふうことに少しでも貢献したいなあと思っています。

そのおかげで今、私どもは、狭いものですからたくさんいらっしゃいませんが、少なくとも2社で23、24万人の方がいらっしゃるというのは、すごく有り難いし、おそらく複数回数いらっしゃる方も多いだろうと思います。ぜひ期待に応えられるように、2社でしていきなないと思っています。

【加藤】 ありがとうございます。本当に建物の維持管理は、なかなか大変なことなので、市が景観条例等に基づいて支援していただいているということをお考えますと、先ほどの吉田先生から、公民連携とか公民協力とか、そういうようなお言葉がありました。それが本当に当たっているような感じもしないではありません。従って次は吉田先生に、このエリアが抱えている課題について、解決していくために地域の皆さんの成果を促してまちづくりにつなげていくことについて、アドバイスがありましたらお願いしたいと思います。

【吉田】 それでは簡単に二つだけ。最初に一言、今日、三浦和也は、山梨のほうのドラゴン太鼓という連帯で活躍しています。残念ながら来られなかったのはその理由でございます。一つはですね、岡崎市は電線が多い。旧248号線沿いを歩くと、電線が真ん中の低いところを通っています。私は、神明宮の大祭を協力しているたびに思います。まちの真ん中の電線はどうにかならないかな。八丁蔵通りの問題でもあると思うのです。この前の台風のことでもそうですけれど、災害も含めて、対応するならば電線の地中化です。それから私は岡崎公園を学生と一緒に歩くときに、坂道の非常に危険なところがございます。そういう意味では舗装などの道路の美装化です。

そういうもの一連にさせていただきたいというのは観光客だけではなくて、そこに住んでいる方や生活される方にとっても便利なことですので、ぜひやりさせていただきたいと思います。それからこれは最後でございますけど、先ほど申しましたよう私たちのいろんな文化というのはその土地から生まれる。私たちが文化とか言いながら、肉体を離れて自分の文化はないわけです。土地から離れた文化というのは一切ないわけです。もちろんその中で連帯とか、普遍性を求めるという意味では、八丁蔵通りのように、まとまった所がございますので、ぜひそれをうまく使っていただいて味噌造りのような文化と産業を一緒にして、広報や、観光をしていただければ一番いいかなと思います。そのために私も夏祭りなんかで、そちらのほうで夏祭りの行事をさせていただくなど協力できると思います。是非そんなふうを考えさせていただければと思います。よろしくお願いたします。

【加藤】 はい、ありがとうございます。電柱は、確かに景観を汚す、汚すという失礼ですけど、無電柱化、それから道路の舗装です。舗装も少し落ち着いたものにするとか、それは今の、歴史まちづくりの協議会のほうで話した提案書の中に入っておりますので、徐々に行政で進めていかれると思います。最後に須田先生には改めて、産業観光とか街道観光の観点から岡崎市に対してアドバイスがあればいただきたいと思います。

【須田】 岡崎の観光、特に今日のテーマになっております、食の観光がございますね。こういうものをお考えます際に二つの大きな動きが出てまいっております。一つは、国の動きでございますけれども、国が食の観

光ということ、独立した一つの新しい観光の分野として、大きく広げていこうということを急速に考えるようになりました。ただ、従来の食の観光と同じだと思われちゃいけないと思ったからだと思いますけれど、先ほど言いましたようにガストロノミーと言いますから、なんのことが分からないのでなかなか普及しない。なぜ食の観光と言われないのかと思います。

その中には地域の伝統的な食文化を発展させるための観光の宣伝とかに、国も補助金を出して積極的に情報の発信ができるように支援をするというものです。ガストロノミーという新しいものをリコースするという意味だったと思います。美食というよりも、もちろん郷土食的なものも含めます。もちろんこの八丁味噌は、その中に大きな要素として入ってくるだろうと思いますが、そういうような動きが一つあります。この動きに乗りまして何か全国的な食文化の中で、この付近の食文化、八丁味噌を代表とするところの食文化が乗って全国的に広げていくチャンスができてきていると思います。

もう一つ大きな動きが、この地域の八丁味噌の早川さんの会社からも浅井社長にもご参加いただきまして、地元の皆さんが大変ご熱心になっていただいて、醸造文化と言いますか醸造観光という新しい名前の観光が急速に盛り上がってきております。そしてこれを全国的に広めていこう動きがございます。この間、大阪で全国の観光の見本市のツーリズムEXPOジャパンという全国的に数十万の人が集まる大行事がありました。従来は東京でしかやったことない行事を今年は大阪でやったわけです。大阪の会場にブースを作りまして、大勢の方が見るわけでありまして。その中に西三河と知多の醸造観光というブースが出ました。西尾市と碧南市と常滑市とそれから半田市でございます。その四つのまちが、タツノオトシゴ状に並んでいるというので、竜の子街道広域観光推進協議会が主催で、また、八丁味噌の両者にもご参加いただいております、発酵文化研究会の支援によってできたブースでございます。この発酵文化研究会のほうは発酵学という学問があるそうです。その学問をやっておられる専門の理系の先生がたが集まり、また、実際の仕事をやっておられるところの味噌の醸造会社とかいろいろなものに入っていて、大学の先生と起業家とそして観光関係者が入ったものをやろうということになって発足したものでございます。これは、全国的な話題になってきているのです。私も、なるべく発信するようにいたしております。その中にこの八丁味噌というのが一つの大きな要素として入りました。従ってこれから醸造文化という、ちょっといい言葉がなかなかないのですが、はじめは発酵観光と言おうとしたのだそうです。ところが、発酵観光と言いますと腸内異常発酵とかあんまりいいイメージがないのです。病気の名前と腐るというイメージ強いのです。確かに腐る面が発酵ですからそれは確かにある。そこで醸造にしようということにしたと。英語では、ファーメンテーションと言うのだそうですね。ファーメンテーションなんて誰も知りません。ガストロノミーよりも知りませんから、取りあえずそれでは、醸造観光でいこうということにして、そして括弧付きでファーメンテーションぐらいにしようかなということでスタートしました。これが、私は、かなり大きな広がりになってくるような気がするのです。

従って、地域的にも全国的にも一つの発展の場ができたということですね。全国的な食の文化を発展させようというガストロノミーという名前ではありますが、国の動きとそれから地域の皆さんがたが中心になって学者から、実務者からそして起業家まで一緒になった、めずらしい連合です。醸造文化、醸造観光はここから広がりつつある。広がり始めたということですね。この動きを、うまく活用すれば八丁については新しい発展が期待できる気がいたしますので、この動きに期待をいたしております。

先ほど市長さんからもお話がありましたけども、岡崎城とそれからこの八丁味噌の郷の一連の囲まれたこの地域。これがこれから一つの大きな核になっていくし、またならないといけないと思うのでございます。おかげ横丁という話がございました。確かにおかげ横丁というのは、地域のまとまりで成功したわけでありまして。ただ、これをこの地域でやりたいなと思いますが、やはり条件が違う。非常にこの地域は幅が広いこ

とと、まだそういうふうな建物の、いわゆる町並みがそういうふうになってないのです。向こうは町並みがそういうふうになっておりましたから、ちょっと改装するだけおかげ横丁という一つのイメージができて、同じような町並みで、江戸時代後期くらいの町並みが、きれいにそろったわけです。

しかもそこで、そこのお菓子メーカーの、商工会議所の会長さんが、ご自分の本社のコンクリートのビルを壊して、おかげ横丁の木造の江戸時代と同じような建物に建て替えたのです。それが非常に大きな刺激になったと思います。見事に家並みがそろったのですね。非常にそろった商店街になっておかげ横丁というものが発展する基礎になったと思います。この地域でそれをやろうとしても今のものを壊すわけにはいきませんのでできません。ここで一つやり方があると思います。それはこの地域をつづら歩きで、岡崎城から八丁味噌の間を歩いていただく。今も歩いておられるが、もっと歩きやすくして立体的にしたらどうかということは、市もお考えになっているようであります。お客さまが歩けるような道の、歩道の色を変える。これによって色を出す。茶色がいいかどういいう色か分かりません。その他にその間にあるお店とか観光客が入るようなところに旗を出すのです。あるいはのぼりを出すのです。その色を統一するのです。

そうすると、それでまちが歩道と旗の色で統一されているように見えます。場合にはそこにある民家も旗だけ出してもらう。そういうようなことで協力することぐらいは可能ですから、そうするとそこに一つのなになにのまち、藍色のまちとか、水色のまちというのができます。それをおかげ横丁的なものにすればいいわけでありまして。八丁歩道の色にするわけでありまして。八丁の象徴色でもお考えになられて、歩道の色をまず変えて、そしてその道筋にあるお店に同じ色の看板を出したり旗を出したりする。民家にもご協力いただいて、そこに一定の同じのぼりが毎日じゃなくてもいいから、土日は少なくともあがるとか、そういうことをすればイメージが作りあげられます。

そうした中で、だんだん家を改造していこうとか、家並みをそろえようかという動きになってくるはずでございますから、そんなことででも手をつけられたら私はそんなに難しいことじゃないと思います。それは明日からでもできるのではないかと思います。そんなことでこの八丁の一体感を作りたい。さっきの方が、岡崎人という言葉を使ったらどうかとおっしゃったけど、八丁人ですね、もっとはっきり言えば、それは一体感をまず作っていただき、そしたら岡崎城からこの方向、北の方向、南の方向、それぞれ私はつながりがあると思うのです。そういうものをもういっぺん発掘して岡崎城を中心に放射線状のおかげ横丁的な岡崎城横丁みたいなものが四方八方にあるといい。中心に岡崎城があり、これだけお店があるとできると思うのです。そういうことになると岡崎の観光は、非常によそとは違った道筋観光ができる。街道観光は、そんなことをやることで難しいことじゃないと思うのです。市民の方々にそういうご意向があるかどうかということが非常に大きいと思います。私は、そう簡単にはまとまらないと思いますが、ご議論いただく価値は十分にあるような気がいたします。そんなご議論をしていただいたらいいですね。おかげ横丁づくりをそういう無理な方法でなしに、手っ取り早い方法で取りあえずシンボライズにやってみる。こんなことなら私はできるだろうと思います。そういうふうなこともご提案申し上げたいと思います。

最後に一言だけ、この付近のことまとめて申し上げますと、一番必要なことは連携と協働だと思います。連携というのはお互いに手を結ぶこと、協働というのは協力の協という字と働くという字を書いて、私は協働と言っておりますが、協力ではない、協働、一緒に働きましょう、一緒にやりましょうということですね。この辺の方々がそれぞれこの岡崎の観光に向かって、少なくとも八丁観光に向かって協働し連携をされるならば、相当の力を私はお持ちだと思います。このまちは経済力が違います。道を歩いていても活気があります。総力がそこに結集できると思います。ただ目標がなかったから、八丁だけではちょっと不十分です。それを皆さんでお作りなられて、少なくとも八丁からまず岡崎の観光を動かしていく。あちこちに北の八丁、南の八丁、西の八丁という所ができるということが私は非常に大事じゃないかと思います。ただ、一

つだけ私は京都の人間ですから東京と京都の間を往復しておりまして一つの大きな錯覚に陥っていることに気が付きます。東海道は東西に走っているというイメージを東京や関西の人間はみんな持っております。名古屋に来ると方向感覚が狂います。来た時には太陽がとてつもない方向から出てくるからびっくりいたしました。南の方から太陽が出るような感じがする、それは東西ではなく南北に走っているからで、豊橋から岐阜までの東海道線も南北に走っている。国道も南北の寄りにふっているのです。従って、ここで東西南北というのは、非常に言いにくいことに私は気が付きました。それをなんかの方法で一つの方角というものを独自の言い方で岡崎の四方八方の方角を表すと12支の丑寅でも羊でも構いません。そんなことでもやりながら、やっぱりちょっと東西南北と簡単に言っちゃいますと誤解を受ける恐れがある。私どもよそ者には気になります。とにかく岡崎城を中心として東西南北に何かそういったような一つのまとまりができて、それが岡崎人と言いますか、この地域のアイデンティティになる。この地域の方々の特性であり、誇りであるわけであります。ぜひともこれからご発展なられますように。そのためには、やはり情報の発信とストーリーのつくり方、そしてまちの皆さんの総意。これではなかろうかと存じます。私はよそ者でございますから、できるだけご支援申し上げると同時に皆さまがたにご指導いただきながら私も何かそういうことについて知恵を出していきたいなと思っておりますので、よろしくお願い致します。ありがとうございました。

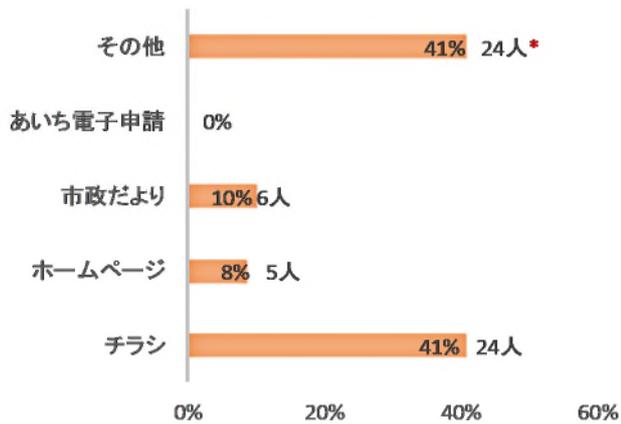
【加藤】 ありがとうございました。すべて須田先生に最後まとめていただいたという感じがいたします。4人のパネリストの方々、貴重なご意見ありがとうございました。八丁味噌はこの地域で生まれた味噌をもとにして、郷土食として、さまざまな時代の人々の嗜好性に支えられて2社の卓抜な経営力もあって苦しいときも乗り越えてこられて、現在まで綿々と伝統産業として繋いできていただいております。今日では、生活様式は洋式になりましたが、味噌の文化というのは、ある意味で和食と言いましょか、日本食の底力になっているようなものだと思います。近年では世界でも和食の評価が高まりつつあります。これから味噌の文化の真価が問われる時代が続いていくと思います。いろいろなご提案があった中で、回遊性と言いますか、つながり、特に最後は須田先生が岡崎城と八帖地区の結びつきということをおっしゃいました。

今、岡崎城でも整備の仕事を少しずつ進めつつあります。その中で岡崎城の公園の中に江戸時代に関係ない石像物、石像とか、ある偉い方を顕彰するような碑とかそういうものがあります。その中に純情きらりの出演者の手形がいくつかあるのです。それは実際には岡崎城とは関係がないので、他に移したらどうかというような考えもあります。それで私は思いましたのが、いくつあるか分かりませんが、純情きらりの手形を八丁と岡崎城の通り道の所にそれぞれに置いて、岡崎城からそこをたどっていくと自然に八丁に至る、八丁からそれを見ていくと自然に岡崎城に至る。その通りに先ほど同じ色の旗を出す、あるいは舗装の色を統一していくと、ちょっと風情のある通り道ができるのではないかと、回遊性も高まるのではないかと感じがいたしました。二つ目は、やはり観光客の方を迎えるには、この土地にそれぞれの何か、個性的な魅力があるところを、見て回り、食べて遊んで、そういうふうになると回る気が起こると思います。さらに体験型とかいうことも注目されております。無電柱化や舗装をきれいにするハードの面に加えて、ソフトな面についても、これから図っていくことが大事だという感じがしております。ピンチヒッターですので、うまくまとめきれなくて空振りしたような感じがしないではありませんが、これで時間もまいりましたので、このパネルディスカッションを閉じたいと思います。4人の先生がた本当にありがとうございました。皆さんご清聴ありがとうございました。

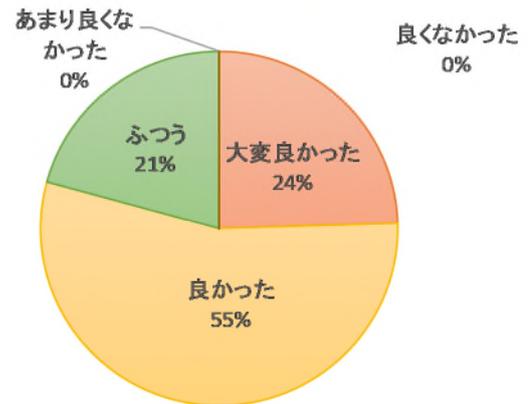
アンケート集計結果

シンポジウムには、89 名の方にご参加頂きました。その際実施されたアンケートには、53 名の方にご協力頂き、歴史まちづくりに関するご意見を頂きました。"

Q1 今回のシンポジウムを何によってお知りになりましたか？

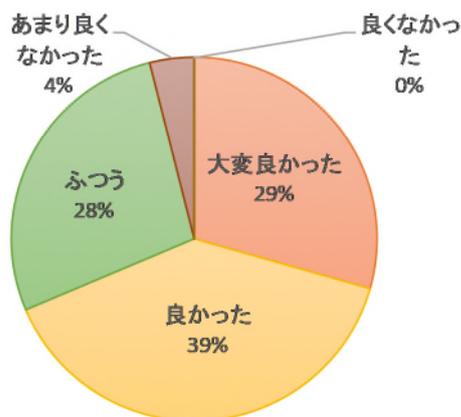


Q2 今回のシンポジウム全体の内容はいかがでしたか？

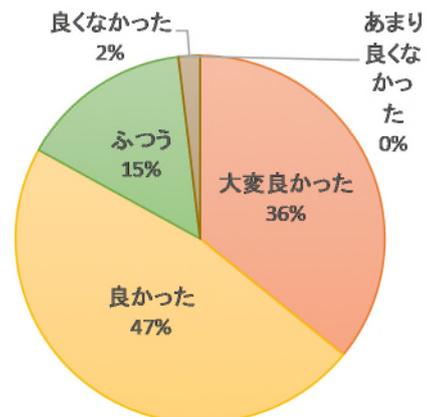


*その他の()内にはFAX受信、メール受信、チラシ郵送、知人からの誘い、会社よりが記入されており8名は未記入。

Q3 活動団体による活動紹介はいかがでしたか？

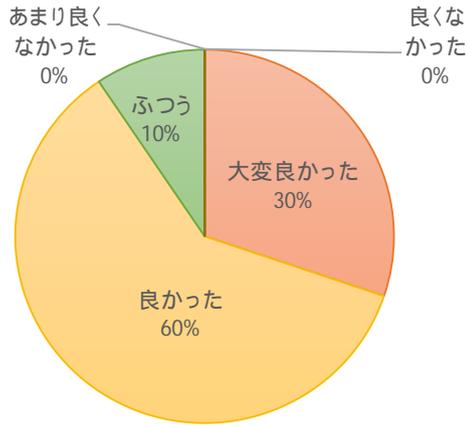


Q4 須田寛氏の基調講演はいかがでしたか？



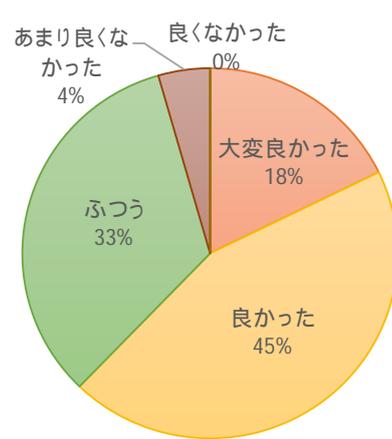
Q5

吉田修氏の基調講演はいかがでしたか？



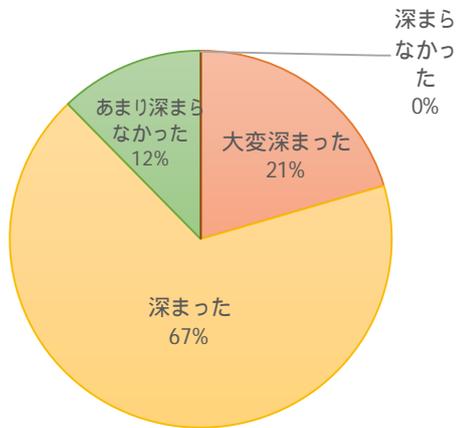
Q6

パネルディスカッションはいかがでしたか？



Q7

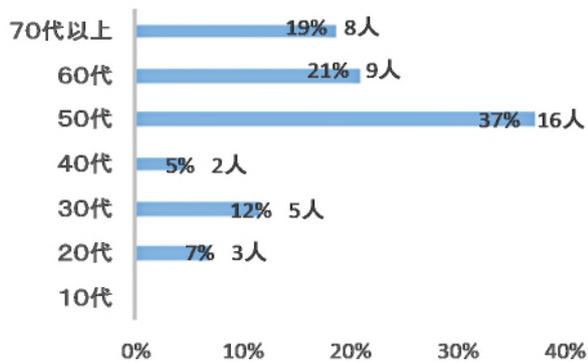
本日のシンポジウムで歴史まちづくりへの関心や理解は深まりましたか？



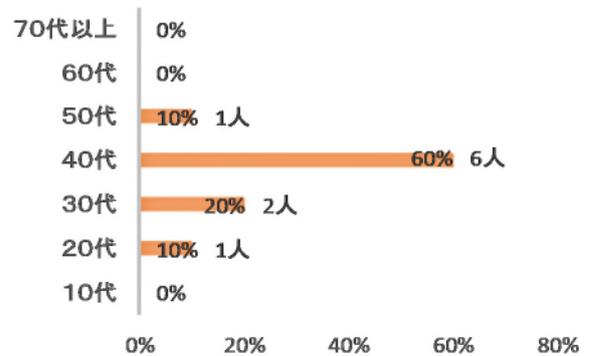
Q8

あなたの性別、年齢層についてお聞かせください

男性43人



女性10人



【ハード面への意見】

- 乙川リバーフロント整備が終焉を迎える中、次のまちづくりは歴史まちづくりと観光まちづくりだと改めて認識した。特に観光まちづくりはまだまだだ。須田先生の講演を聞いて須田先生を岡崎市の観光アドバイザーとして迎えてもよいのでは。
- 岡崎市内の森邸の活用利用を岡崎マイスターに初動の題材として欲しい。歴史まちづくり法とMINTOを使っての始動を考えて下さい。
- 八丁味噌の拠点は良いが、それらの拠点を繋ぐ物理的ネットワークが美しくないのが残念である。ヨーロッパの町並みは拠点を繋ぐ、普通の道の石畳の一つ一つの石にも歴史を感じる。綺麗に整備歩道は、美しく歩きやすいが、歴史文化は感じない。

【ソフト面への意見】

- 時代と共に変わる意識・風潮等々に対応した、新たな価値創造といった視点が重要。新たな価値創造こそ持続可能型社会への展望に欠かせない要素か。
- 基調講演の資料の出来栄はよいが、一部活字が小さい。
パネルでは司会者が話し過ぎ。
- より多くの市民が参加(関心)できる方法を考えるべき。内容はとても素晴らしいので、より多くの人を知る事が出来たらと思う。
- 能見神明宮の参加人員がだんだん少なくなっている。参加アップ委の検討やアイデアを広く求めて欲しい。
- ストーリー性のある観光資源づくりで点ではなく面で考えてみる企業の覚悟もいるのでは。
- 地元でも味噌のことはあまり詳しくなく、今回良きライバルで良きパートナーという話を聞いて、なるほどと思った。
- シンポジウムの論点が分かりにくい。どういう結論を導きたいのか分かりづらい。
- 観光への知識が深まり勉強になりました。岡崎でも味噌六太鼓など色々な活動があることを知り、岡崎のまちづくりに参加したいと思う。
- 次回は、歴史に関するシンポジウムを願う。
- 岡崎住人としてこのようなまちづくりシンポジウムまた機会があれば出席したい。
- 今後も継続願う。期待します。
- 面白かった。八丁味噌を市民がもっと知らないといけない。
- 年々参加者が減っている気がする。
- 味噌六太鼓のお話面白く聞きました。100年の取り組み、こんなところにも頼もしい方々がいて勇気をもらいました。
- 岡崎はあくまで歴史観光に徹する(中世～戦国時代1200年～1600年)
- シンポジウムでなくてもよいのでは。人が集まらないので別の方法を考えて欲しい。
- 観光を活かしたいなら、春夏秋冬その都度行きたいイベントや祭り、食べ物や体験などを確立していくことで、持続可能になり歴史も守られるような気がします。
- 須田先生のまとめが素晴らしかった。

5 . 次回シンポジウム開催案内

「岡崎市歴史まちづくりシンポジウム」
次回開催案内の希望について

岡崎市では、歴史的景観を市民一人ひとりが再認識し、一層の誇りと愛着を持って継承できるよう、また、美しく景観ある岡崎を創出し、訪れる人々に感動を与えられるようなまちづくりを推進することで地域の景観の価値を高めようとしています。今後予定期間に「岡崎市歴史まちづくりシンポジウム」を開催していく予定としています。

次回のシンポジウムについて、開催内容の参加案内を希望される方は、以下にご連絡先をご記入の上、受付にご来場をお願いいたします。

お名前		
1 郵送		
希望される連絡方法 ※郵送の場合は、住所や 連絡先をご記入ください	2 メール	
	3 FAX	

6 . 歴まちインスタ宣伝チラシ



7 . 日本の観光 きのう・いま・あす 須田 寛著

